大正元年	七	—	—
二年	一	—	—
三年	四	一	二
四年	四	—	一
五年	一一	二	一
六年	一	一	—
七年	一	一	—
八年	五	一	—
九年	八	—	—
一〇年	四	一	—
一一年	二	一	—
一二年	—	—	—
一三年	二	一	—
一四年	二	一	—
昭和元年	三	—	—

十五區中最後に出來た山元町の麻布藝者

花街の起立

親鸞上人が地に挿した一枚の銀杏から大樹となつたと傳承する逆銀杏——化銀杏によつて名高い善福寺は、安政六年から明治の初め迄、米國公使館に充てられ、攘夷論のやかましい時節柄、總領事タウンセント・ハルリスは、國交の紛を思つて身を愼み、一歩も門外に出ず、朝夕の運動も本堂の縁側ばかりでやつて居たので、靴の痕が坊の椽の板に付いて居た。來遊の米國人は必ずこれを訪

れたものだつたが、明治三十年頃此縁側の一部を伏見の本願寺へ持つて行き其後本願寺で燒失して終つた。

○

この善福寺境内で、慶安年間門前町屋となつた元町に、舊飯野藩主保科氏の邸を併せて、山元町と改めたのが、明治二年。又、網代町は、昔時麻布村の内で、享保中に新網町二丁目の内の代地となり、元文三年舊稱を略して今の稱——網代町に改め、明治二年、今井寺町代地及び飛地を合せ、五年松平氏邸を合した。(「東京案內」)

○

「佛智名號となれば、五逆謗法きらひなく、女人惡人へだてなく、淨土往生定りぬ」と、梵唄の鉦聲聞えたる此のあたりに、麻布藝者と名乘つて新お召にメリンスの長襦袢、空氣枕を帶の下に用意する白粉くさい魔者が跋扈するやうになつたのは大正元年からの事であつた。(「東都新繁昌記」)

○

麻布花街の指定地許可は大正二年である。或は許可を見越して、既にその前年、小石川白山花街のそれのやうにお師匠さんが活躍したものか、——それはとにかく、筆者はこの花街指定地許可當時、昨夏郊外小山外二三箇所に新指定地が許された折のやうに、かなりやかましい問題が新聞紙に

報導された事を、おぼろげながら記憶する。

○

鳥居坂署の報告によれば、この山元町に、根津嘉一郎氏の邸宅があつた。それを明治三十三年頃開放したので、附近は何れも住宅地となつて居た。十五區中麻布區だけが區内に一つの花街を持つて居らぬと云ふ事は、土地發展上甚だ遺憾であると云ふ理由で、大正二年の春頃有志數名が代表となつて、花柳地の許可を出願。めずらしくすら〳〵運んだと見えて、その年の秋――大正二年十月十日付で、山元町一部（五四―五九番地）と網代町一部（一七―二二番地）約八千坪を指定地として許可の指令が下りたのであつた。

組合の組織と紛擾

「麻布三業組合」が出來たのは、許可指令後五日――大正二年十月十五日のことであつた。大正七年になつて、組合組織を株式にして「麻布三業株式會社」を創立したが、十二年一月見番の利權問題から待合、料理屋對藝妓屋の紛擾惹起し、會社を解散して「麻布藝妓屋見番」となり、昭和二年八月「麻布三業組合」となつて現在に至つた。

○

大正七年六月、玉祝儀値上の爲め、待合料理屋對藝妓屋の紛擾が起つたが、七月落著。その後十二年一月の紛擾は、既述の通り組合の組織を變更することによつて、問題は解決した。――これらの紛擾は、どこの花街のゴタ〳〵とも同じ原因、同じ經路で解決したのであらうが、もうすこし具體的に詳述したかつたけれども、簡單な報告以外、今は據るべき何物もない。

花街起伏と妓風

大正二年創設當時から約一年間に、藝妓屋待合各二十戸、藝妓約七十名、爾來逐年增加し、十年頃より大正末期には藝妓約二百名を算へたが、昨年七月の藝妓連名によれば、藝妓屋五十二軒、大妓百二十名、小妓十三名、合せて百三十三名に減じて居る。これは收容した震災藝妓の復歸と財界不況の致すところであらう。

○

以上の數字で、この麻布藝妓の妓風を想像すると、卷頭に引例した「東都繁昌記」の著者が云ふ程ではあるまいが、妓品に於て白山の下位に置かれるものではあるまいか。殊に、狹い花街に於て十妓近い抱妓を擁して居る藝妓屋が數軒にある事などは、二十歳の半玉と共に筆者に妙な想像を逞しくさせる。

何の催しで、それが許されたか、報告を得たいと思ふが、大正十年頃假裝、手古舞が一二回許可されたさうである。これ以外、妓情を述べる材料なし。

○

元來が指定地の附通は住宅地であつたから、從來より飮食店や、花街相手の商店が增加した事は云ふ迄もない事で、所謂「箱のはいる」料理屋は花街起立の當初は僅かに七軒位ゐだつたが、今は十四軒、待合が現在四十九軒あることは、すばらしい發展ぶりだ（數字は昨年六月五日の報告）

花街雜纂

王祝儀の變遷を一瞥して、不完全な稿を終るとしよう。許可當時から大正七年頃迄は、祝儀二時間一座敷一圓五十錢、玉代一時間五十錢、箱代三十錢。その後現在に至る迄は、祝儀は五十錢高の二圓、玉代は据置で箱代が五十錢。——これは大妓の計算らしい。小妓は多分、この半分か三分の一であらう、遠出其他の計算は報告がないから判らぬ。

○

出先きの刎ね錢は、大正七年——會社組織後から現在迄を報告されて居る。因に祝儀は一切藝妓屋の所得らしい。

	玉代一本に就き	箱代一箱に就き
出先き刎ね	一三錢	一〇錢

	見番控除	三錢	二〇錢
	三業組合控除	四	—

箱丁所得 —錢

藝妓屋手取 三〇

	待合	藝妓屋	藝妓	幇間	
大正二年	一〇	一一	四	—	二〇錢
三 年	一八	二六	九八	—	—
四 年	二二	二三	五三	—	
五 年	二七	三二	七八	—	
六 年	三〇	四五	一一六	—	
七 年	三三	五九	一四九	—	
八 年	三六	六五	一六四	—	
九 年	四三	六三	一八四	—	
一〇年	四一	六二	一六九 二（六本木）	—	
一一年	四六	五七	一六三 一（同）	—	
一二年	四八	五九	一九四	—	
一三年	四六	五二	一七二	—	
一四年	四六	四六	一五二	—	
昭和元年	四八	五一	一四二 六（内六本木一）	—	

（以上昭和四年三月自警所藏「大東京風土記」麻布區の卷——市川柳影氏）

（二）交通警察

土地の高低激しき本管內は到る所坂路多く、其爲に惹起する所の交通事故も豫想せらるゝわけである。主要道路及準主要道路は何れもコンクリード・アスファルト或はサンド・アスファルトにて舖裝せられ排水良好にして道路は美麗である。然し乍ら復興地域外にあつた爲道路の分布狀態は依然昔の儘で其幅員比較的狹く屈曲多く坦々たる大道は電車通り以外には尠い。今管內の主要道路に就いて述ぶれば——

南北道路

(一)飯倉町一丁目より飯倉町五丁目に至る幹線道路は其昔飯倉村往還と稱して虎の門・品川間の通路に當り已に寛文年間往來が盛んで非常な賑ひを呈した。卽ち、品川方面から袖が浦の岸に添ふて延びて來てゐた昔の東海道は札の辻のところで二つに分れて、一方は芝口から日本橋の方へ續き一方は赤羽から飯倉に續いてゐたものである。今でも其兩側の店舗とマロニエの街路樹はものさびた靜かな奥行のある感を抱かしめる。此道路には虎の門方面より札の辻へ至る市電（札の辻・飯田橋間）が通じ管内に飯倉町一丁目、飯倉町四丁目、赤羽橋の三停留場がある。明治四十五年六月の開通である。

(二)市兵衛町一丁目から仲の町の東を過ぎ飯倉片町に添ひ永坂を下り十番通りを横切つて山元町に至る道路及仲の町の北より鳥居坂町と東鳥居坂町の間を南して廣尾町或は四の橋に通ずる道路があり、

(三)更に廣尾橋より木ノ下坂を上り三軒家町を通つて櫻田町へ向ふものがある。

(四)一之橋より古川橋に到る幹線道路は交通頻繁で路面には市電及市營乘合自動車が走つて居る。

東西道路

(五)此の一之橋より古川橋に來る道路は古川橋に於て二分し一は芝區松坂町伊皿子方面へ、他は天現寺を通りて東京府下に入る。この道路は豐多摩の郡部に接續してゐる爲農民が市内へ往復する要路で大正十二年頃まで菜貨糞尿の運搬車と古川附近に居住營業してゐた四百有餘の荷馬車が輻輳してゐたが最近之等の荷馬車は漸次貨物自働車に依つて代られつゝある事は言ふ迄もない。

此道路に走つて居る一ノ橋・天現寺間の電車は未だ市内に馬車鐵道があつた時代卽ち明治三十三年の春組織せられた川崎電氣鐵道會社の事業を繼承した東京電氣鐵道株式會社が、先づ麻布廣尾橋を起點とし、河流に沿ふて一ノ橋を渡り赤羽橋芝園橋を經て、金杉橋南詰に至る路線の特許を得明治四十二年六月全線開通し、其後明治四十四年七月三十一日尾崎市長の時東京市の經營に移つた。管内には一ノ橋、二ノ橋、三ノ橋、古川橋、四ノ橋、光林寺前、天現寺橋の七停留場があり、古川橋に於ける分岐線は芝區魚藍坂下より目黒驛或は白金猿町へ通ずるが一は魚藍坂を登りて泉岳寺前に下る、前者は明治四十五年六月、後者は大正八年九月開通した。

古川橋電車線三叉路には昭和五年六月一日より交通巡査立番箇所に「進・止（ゴー・ストップ）」の信號機を設置して交通整理取締を實施してゐる。

(六)飯倉町四辻から飯倉片町を經て六本木へ向ふ道路は自働車の交通多く此幹線を走る電車線は明治四十五年六月の開通にして狸穴町・飯倉片町・三河臺町の三停留場がある。

(七)赤羽橋北側に於て芝公園よりの道路を享けて赤羽河岸に沿ひ南北日ケ窪町を經て六本木通に合

する道路は比較的其交通量が少い。

(八)前記の道路と併行して一ノ橋より六本木へ通ずる所謂十番通りは本管内に於て最も繁華な通りであり從而交通量も多く其割に道路幅員狹少の爲雜沓を極めてゐる。

通行禁止——此十番通り宮村町二番地先より網代町二番地先に至る間は露店出店慣行地にして夜間人出多く混雜するので昭和四年十月十日より毎夜午後六時から午後十時まで自動車牛馬車の通行を禁止して交通事故の防止に努めた。昭和五年に至つて前述の慣行地々續である宮村町二番地より坂下町三十四番地迄指定地を延長し片側交互に出店交通の取締を行つてゐる。

(九)二ノ橋より仙臺坂を上り盛岡町、本村町の間を通り北條坂を下りて笄町に至る路線は仙臺坂下にて雜色通りを併せ坂上に於て一本松四ノ橋方面へ支路線を派生する。

之等諸主要道路の外天現寺橋より廣尾橋・赤十字病院下の二停留場を經由して霞町一丁目方面へ走る市電の通路は市内に少い專用軌道である。

管内に於ける交通取締狀況に就いて述ぶれば——交通巡査立番所は現在古川橋(三人勤務)、二ノ橋(二人勤務)、中ノ橋(一人勤務)の三ケ所で在つて、管内交通取締實施上最も樞要な位置にある。此中二ノ橋は自動車交通量增加の爲、昭和六年三月迄十番にあつた交通巡査立番箇所を同月六日移したものである。自轉車交通に就いては一人の專任巡査が管内を巡視し交通取締規則の違反事項摘發及其他の取締に從事してゐる。

尙自動車一齊取締は毎月一回外勤日勤三十餘名及交通巡査七名にて自動車の連度無免許運轉其他の不正行爲者に對して勵行しつゝある。

最近に於ける特殊施設

交通事故防止會

交通事故の大多數を占めてゐる自働車運輸營業者殊に運轉手に對し交通上に關する規則を遵守し自警自律事故防止の觀念を鞏固ならしめ一面街路に事故防止上必要なる施設を爲し、更に民衆に對する交通上の法規並に交通道德の普及徹底を計る目的を以て昭和五年十一月交通事故防止會を組織した。運轉手に對する訓授講演、民衆に對するポスター、ビラ、活動寫眞講演等に依る宣傳運動、標示器の設置、管内樞要場所に於ける標識六十餘箇の設置等交通警察上に飛躍的活動をなして寄與する所が多い。

安全地帶及橫斷步道

飯倉五丁目派出所前交叉路は交叉角度の關係より其面積非常に廣く橫斷頗る困難である爲橫斷步

道と中央の安全地帯の設置とは交通安全上緊急の必要事で昭和六年春以來市道路課に其設置方を數次交渉の結果慥々完全なる施設を見尚飯倉二丁目交叉點にも明瞭なる横斷歩道を區劃したので附近の町民は非常に喜んで居る。

尚最近の交通事故統計表を擧ぐれば左の如くである。

鳥居坂署事故種別累年表

事故種別 / 年度別	計		電車		自動車		自轉車		人力車		牛馬車		荷車		其他	
	事故件數	死亡	事故件數	死亡	事故件數	死亡	事故件數	死亡	事故件數	死亡	事故件數	死亡	事故件數	死亡	事故件數	死亡
大正十四年	353	4	192	52	—	19	170	3	73	20	116	74	—	65	1	—
大正十五年	119	5	163	19	215	78	2	64	6	—	473	—	67	1	—	111
昭和一年	236	3	173	31	—	22	106	2	70	4	—	576	165	—	—	10
昭和二年	313	—	193	47	—	33	188	—	109	13	—	641	—	36	1	—
昭和三年	303	—	189	34	—	30	156	—	88	15	—	1077	—	47	1	—
昭和四年																

事故種別 / 年度別	自動車			自轉車			人力車			牛馬車			荷車			其他		
	事故件數	死亡	負傷	事故件數	死亡	負傷	事故件數	死亡	負傷	事故件數	死亡	負傷	事故件數	死亡	負傷	事故件數	死亡	負傷
大正十四年	73	2	90	116	1	126	14	1	10	4	—	—						
大正十五年	64	6	73	473	—	67	111	—	3	9	—	8	2	1	1			
昭和一年	70	4	88	576	165	—	—	10	—	7	7	—	3	2	—	1		
昭和二年	109	13	88	—	641	—	36	1	—	—	10	—	3	13	—	6	—	—
昭和三年	88	15	—	1077	—	47	1	—	1	9	—	7	11	—	6	—	—	—
昭和四年																		

昭和六年自一月至五月交通事故表

事故別 / 月別	自動車	電車	自轉車	サイドカー	其他	計	死傷者數 死亡	死傷者數 重傷	死傷者數 輕傷	死傷者數 計	物件損害額
一月	二七	四	三	二	一	二九		三	二	三	四八六、五〇
二月	二二	一	一	一	一	二七		二	二	二	三〇四、三〇
三月	一六	一	一	一	三	三〇	一	一	一三	一三	一四一、〇〇
四月	二〇	四	七	一	二	三四		四	九	一三	三六〇、三〇
五月	二四	四	八	一	二	三五	一		八	九	二五〇、〇〇
計	一一四	一四	三〇	八	九	一五二	一	一〇	公三	九三	一、八三二、五〇

左の車輛表に於て自家用の自動車並びに自動自轉車が如何に多いかに依り自轉車が比較的少いとに依つても管内の情勢を推測する事が出來る。又明治二十九年末だ市電も通ぜず自動車もなかつた時代、市内交通の覇者人力車の停車場は當時の麻布警察署管内に於て六拾五ヶ所あつて此内四十六ヶ所が現管内に相當する範圍中に在つた。今僅かに時代に取り殘された十六臺の人力車と當時公設人力車停車四十六ヶ所と更に大正二年の營業用人力車數四七六臺とを比較する時今昔の感に堪へないではないか。

車輛表

昭和五年十二月末現在

車輛別＼用途別	自家用	營業用	計
自動車々庫數	一〇四	四九	一五三
自動車臺數	一三〇	一五一	二八一
人力車數		一六	一六
自轉車臺數	四、五五五		四、五五五
オートバイ臺數	七一		七一
牛車		一	一
馬車		三三	三三
大車		一〇	一〇
中車		六七九	六七九
一、乘客運輸營業者	三七名		
一、貨物運輸營業者	一四名		

（參考）自働車臺數ハ麻布區全體で大正四年――三三臺、大正七年――七六臺で其當時麻布の貴顯紳士には二頭立の巴里好みの瀟洒なる馬車を馳つて跨音戛々として行人の目を掠めてゐたものも少くなかつた。

（三）營業警察（工場）

保安警察中營業、工場關係の主なる取締對象地たる商工業地が管内の低地である事は前述の通りであるが、集團的商業地域としては坂下町、網代町、山元町附近があり、路線的商業地域として古川沿岸一帶の地があり、新廣尾町、田島町は殊に工場多く其他本村町、竹谷町、新堀町附近に點々として散在してゐる。そうして之等の土地にある左表の如き營業を時代の進展と場所の關係が漸次管外へ驅逐し或は消滅し或は他種の營業に轉化せしめつゝある。

漸衰營業種目調査表

麻布鳥居坂警察署

年別＼營業種別	旅人宿	下宿	木賃宿	旅人宿兼下宿	質屋	古物商	案内業者	代書業者	紹介業
大正三年	3	17	18	5	29	342	2	16	23
大正六年	—	9	18	7	30	442	2	19	12
大正九年	—	14	18	6	24	379	6	7	9
大正十二年	6	10	16	7	20	309	4	6	11
大正十四年	—	9	14	9	18	280	—	7	12
昭和四年	—	8	14	8	18	125	—	7	17
昭和六年	—	5	9	9	16	96	—	7	7

管内には主として左表の如き諸營業が營業方面の取締の對象となつてゐるが本署に於ては先づカフェー、バーは近時の發展であるが風俗上其他漸次弊害の萠が表はれて來たので昭和四年九月十三日其の取締に關して規則第二條の二に依り左記事項を命令し其の遵守を期しておる。

指示事項

一、營業時間は午後十二時を超へざる事
二、舞踏又は演劇活動寫眞（幻燈を含む）舞踏其他興業に渉り若くは之に類する行爲を爲し又は爲さしめざる事
三、甚だしく附近に迷惑を及ぼす可き高聲樂器は之を使用せざる事
四、飲食物の料金を表示する事
五、身元不詳なるものを雇入れざる事
六、客の誘引を爲さしめざる事
七、雇女をして客と外出せしめざる事
八、雇女をして藝妓類似の行爲を爲さしめざる事
九、客の求めなき飲食物を提供し又は食券招待券等の押賣をなさゞる事
一〇、雇人より出錢其他名義の何たるを問はず金錢物品を徴收せざる事

管内諸營業統計表

營業種別	明治二十九年	大正十二年	昭和五年六月	同十二月	昭和六年五月
料理屋	五〇	一二	九	八	七
飲食店（カフエバーニ命令ヲ發シタルモノ）	一八七	二二五	八六	七八	七二
飲食店（其他）			一八三	一八二	二〇六
貸席	一	二	二	二	二
藝妓屋	一	五五	四六	四六	四六
待合茶屋	一	四六	五〇	五〇	四九
藝妓	五	一四五	一二五	一二一	一二五
旅人宿		六	—	—	—
旅人宿兼下宿	一一	七	九	八	九
下宿屋		一〇	六	六	五
木賃宿	三	一六	一二	一一	九
遊技場（撞球場 麻雀 圍碁將棋 其他）	九	一一	二三	二三	二一
遊技場（撞球場 麻雀 圍碁將棋 其他）			二〇	二六	一八
遊技場（撞球場 麻雀 圍碁將棋 其他）			一〇	六	七
遊技場（撞球場 麻雀 圍碁將棋 其他）			四	二	四

營業種別	明治廿十九年	大正十二年	昭和五年六月	同十二月	昭和六年五月
質屋	三五	二三	一七	一六	一六
古物商（店舗）	二八〇	二九八	一二一	一二〇	九六
古物商（人員）	—	—	二三八	二三〇	一五七
雨替	六	一	一	一	二
紹介業（藝娼妓酌婦 寄子 不動産 其他）	二九	一一	一	—	—
紹介業（藝娼妓酌婦 寄子 不動産 其他）			二	二	一
紹介業（藝娼妓酌婦 寄子 不動産 其他）			二	二	二
紹介業（藝娼妓酌婦 寄子 不動産 其他）			四	四	四
浴場營業	三〇	二六	二六	二六	二六
代書	—	五	九	九	九
請負業	六	三七	四六	四四	四一
占業	—	一一	一八	二〇	二三
讀賣業	—	—	一	一	—
雜業	二八八	一二四	一六一	一六六	一一八
派出婦會	—	—	六	六	四

（註）—印ハ無ヲ意味シテキルノモアリ或ハ不詳ヲ意味シテキル明治二十九年度ハ麻布警察署管轄内即チ麻布區一圓デアルカラ其儘比較ニハナラヌ。

料理店、飲食店、待合、藝妓屋ノ營業狀況

昭和五年十月調

名稱	藝妓屋	待合	飲食店	料理店
戸數 昭和四年九月	50	52	183	8
戸數 昭和五年九月	48	51	186	7
藝妓中紋數 昭和四年九月	113	69	211	21
藝妓中紋數 昭和五年九月	125	77	224	24
昭和九年四月 客數	2,045	1,360	82,350	820
昭和九年四月 金額	4,006.950	2,721.300	27,450.00	2,460.000
昭和九年五月 客數	1,737	1,158	82,300	750
昭和九年五月 金額	3,474.240	2,316.160	26,975.00	2,250.00
兩年減 客數 增				
兩年減 客數 減	308	202	50	70
兩年減 金額 增				
兩年減 金額 減	622.00	405.14	475.00	210.00
九月中ノ客數、金額 比率 客	0.84	0.85	0.99	0.91
九月中ノ客數、金額 比率 金	0.84	0.85	0.98	0.91

この營業狀況及物價高低の態樣を示せば左表の如くである。

今之等各種の營業は現今不況の影響を受けて共利潤も減少してゐるのが大體の傾向であるが今

指示する等の方法を講じてゐる。

其他興業場に就いては、非常口、映寫室、電氣設備等の不完全なるものに對して夫々改善方法を

活動寫眞及寄席ノ營業狀況

昭和五年十月調

名稱	管內數	昭和四年九月中		昭和五年九月中		兩年度客數金額增減			
	昭和四年九月	昭和五年九月	入場人員數	總金額	入場人員數	總金額	入場人員	增	減
活動寫眞	2	3	3,869	20,891.70	67,646	25,719.90	28,954		4,828.20
寄席	3	3	3,905	1,088.60	3,662	691.15		243	397.50

重要物價高低表

昭和五年十月調

品目及種別	昭和四年九月中	昭和五年九月中	高低比率
反當 麥	10.00	7.00	
反當 豆（耕作物）	4.00	2.80	0.30
千貫 薪物類	10.00	7.00	0.30
家具類	20.00	12.00	0.40
食物類	1.00	0.80	0.20
野菜類	0.10	0.60	0.40
反當 地代	0.70	0.45	0.10
一畳=付 賃	2.20	2.00	0.10
一家=付 荷車賃銭	月貸 3.50	3.00	0.14
一臺=付 自動車賃銭	月貸 55.00	35.00	0.36

貳なる營業組合

麻布三業組合

事務所　麻布區網代町二十一番地

創　立　昭和二年八月(風俗警察の部參照)

概　要　區内にある料理店待合業藝妓屋業並に從來麻布區三業に緣故ありたる同業者を以て組織し麻布三業の親睦及び隆昌發展を計るを以て目的とする。

鳥居坂警察署管内麻布區飮食業聯合組合

事務所　鳥居坂警察署

創　立　昭和四年十月

概　要　鳥居坂警察署管内の飮食業者を以て組織し、組合員相互の親睦發達を計り營業上の改善、向上に務め主務官署の保安衛生營業に關する命令及び示達を組合員に徹底せしむる事を目的とする。

麻布區西洋料理業組合

事務所　麻布區三河臺町一三番地平林銀次郎方(六本木署管内)

創　立　大正十三年十月

概　要　麻布區内に於ける西洋料理同業者を以て組織し組合員の親睦、同業の發達向上を計る。

鳥居坂美容術營業者組合

事務所　麻布區新廣尾町二丁目百八番地齋藤綾助方

創　立　昭和五年十一月二十一日

概　要　本署管内美容術營業者を以て組織し、取締規則の遵守、業務の向上、組合員の親睦を計るを目的とする。

麻布鳥居坂女子美容術組合

事務所　麻布區宮村町六番地中山つゆ方

創　立　昭和五年十二月八日

概　要　本署管内に於て結髮、染毛、美顏術、鬚毛直しの營業を營む者を以て組織し、取締規則の遵守從業員の健康保全共存共榮を其目的とする。

管内質屋營業者及取扱件數竝金額統計表

年度	質屋數	質物取扱件數及金額							
		入質				流質			
		件數	金額	一件ノ金額		件數	金額	一件ノ金額	
大正六年	30	174,590	428,713	2.455	円	151,145	319,466	2.113	円
大正九年	24	112,948	758,100	6.712		107,046	699,907	6.538	
大正十二年	20	71,722	553,185	7.713		72,033	565,078	7.845	
大正十五年	18	100,772	796,658	7.896		89,921	735,410	8.178	
昭和四年	19	100,957	717,017	7.102		87,633	645,552	7.367	
						8,512	51,530	6.054	

本管内に於ける工業は逐年發達して來た。卽ち其適要工場のみに於て見るも大正十年四四工場であつたが昭和四年には七七工場を算して昭和五年一月十一日の金解禁及其後全世界を襲つた不況と内外經濟的惡材料は事業界の萎縮となり其適用工場數も昭和五年には七四、昭和六年には六八となつて漸次減少整理され、之に伴ふ職工解雇等の問題より爭議も頻發して來るのである。

第一種工場法適用工場業態別調表（昭和六年五月調）

業態別	數
製絃工場	二
化粧品製造工場	一
鉄金工場	四
鏡物工場	一〇
電氣其他諸器具	一〇
電氣製絃工場	一
製菓工場	一
綿打工場	一
製造工場	二
電球製作所	六
諸機械工場	八
製材工場	三
酸素鎔接工場	一
歯車工場	一
石材加工々場	一
印刷工場	二
諸附屬品製造工場	三
飲料水製造工場	一
塗工場	一
計	六八
第二種非適用工場數	三〇五
第三種非適用工場數	一九〇

最近に於ける特殊施設

(一)東京工場協會麻布支部

曩に組織された東京工場協會は其規模大きく各工場經營者相互の親睦を計る點に於て遺憾があり且又其目的を達成する爲めの各種の活動にも地方の實狀を酌酌する事が困難であつた。其缺陷を補ふ爲同一目的の下に昭和五年十月麻布支部を組織し會員實に二百五十名に及び爾來着々活動中で工場警察に資する所が多い。

第六節　衛生警察

區內衛生施設の沿革を略述すれば、未だ明治の初期及中期の衛生施設は極めて幼稚で下水道及道路の改善等は殆ど行はれず、一個の塵芥箱を數軒にて共同使用し其塵芥は一定の請負人が之を處分する樣な狀態であつた。屎尿は一ケ年契約にて一人に對し三十七錢位の割合にて賣買するのが普通であつた。然るに明治三十三年八月麻布區に於ける衛生組合の設立を一轉期として衛生施設は漸次進歩して來た。卽ち塵芥は請負人の手を離れて區役所の處分する所となり塵芥箱は可及的に一戸每に備付られた。屎尿處分に付ては從來被恩惠的に若しくは金子、野菜類に依つて汲取人が屎尿を貰つて行く狀態であつたが却て反對に處分代償として汲取賃を請求せらるゝに至り、此處に於て管內の半數は區役所に於て、殘りの半數は個人の處分する所となつた。本署管內は有識有產の階級多く衛生觀念比較的發達せる筈なるに拘らず古川沿岸に劣らず高臺の邸宅地にも傳染病患者の發生多き爲該衛生組合は其設立と同時に下水の改善傳染病發生地附近の消毒清潔方法に意を用ひ其豫防に努めて來た。此組合は大正二年區內各所に町會の設立を見るに及んで、自然に消滅し管內の衛生行政は區役所、警察署、町會の手に移つて此三者相協力して現在に至つた。

今衛生警察の地理的關係を見るに古川沿岸地帶は料理店、カフエ、バー等多く、十番通りは各商

店、各種飮食店櫛比して殷賑を極め、其裏街である網代町、山元町は麻布三業組合地として之亦衛生警察上重要なる場所である。三ノ橋、四ノ橋附近の古川沿岸接續町は護岸擴張工事實施の爲其狀態に多少の變革を來したが依然として今尙木賃宿、馬屋、勞働無產階級の住宅等軒を接し雜然としてゐる。衛生施設に付ては未だ完備してゐるとは言ひ難く、例へば下水道の如きは僅かに飯倉森元町の一部が完成して居るのみで他の大部分は汚水の放流する儘に任かせてある。上水の普及も完全ではなく下層階級中未だ井戸水を飮料に使用してゐるもの五十戸ある。斯の如き狀態であるから傳染病の發生及び之に伴ふ死亡率逐年增加して來る傾向があるが昭和五年度に於ては僅かに減少してゐる。今最近六ケ年の概況を調査して見る。

管內傳染病患者發生狀態統計表

病名別 / 年度	總計		コレラ		赤痢		腸チフス		痘瘡		發疹チフス		猩紅熱		ヂフテリア		ペスト		パラチフス		流行性腦脊髓炎	
	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡
大正十四年	187	45	1	—	27	16	117	25	—	—	—	—	20	1	16	3	—	—	6	—	1	1
大正十五年	177	49	—	—	46	25	92	16	—	—	—	—	24	3	9	3	—	—	8	1	1	1
昭和二年	206	47	—	—	75	35	61	10	—	—	—	—	45	1	22	2	—	—	8	—	1	1
昭和三年	217	42	—	—	81	32	59	6	—	—	—	—	54	1	30	4	—	—	1	—	—	—

昭和四年	252	53	—	—	103	36	64	10	—	—	—	—	41	1	34	4	—	—	8	—	2	2
昭和五年	229	50	—	—	107	34	62	9	—	—	—	—	39	2	16	2	—	—	5	3	—	—

右表に依つて看取せらるゝが如く管內傳染病は赤痢を筆頭に腸チフス、猩紅熱、ジフテリア、パラチフス等の順序である。

之等傳染病の豫防に關しては下水道の完成――殊に吾々は之を暗渠下水道の完成に俟たなければならないが――上水道普及塵芥汚物處分方法の完璧を絕對必須の要件とするが本署に於ては公共溝渠及私設下水を每年春秋の二回調査し、築造改造、浚渫の箇所を指摘して改善方法を講ぜしめ、不完全なる塵芥容器及設備なきものに對しても遺憾なき監視の下に在る。其他飮食店に就いては店舖調理上の改善を促し、前に昭和四年十月七日鳥居坂警察署管內飮食業聯合組合の組織と共に自働的に衞生其他行政警察の完成が期せられつゝある。菓子製造場調査、駄菓子一齊調査、靑物營業者調査、仔犬調査、狂犬豫防注射、或は腸チフス豫防注射等の積極的活動により、一方部民に對する衞生智識の普及啓發の手段として各種衞生展覽會、衞生講話、衞生活動寫眞、小學校敎員、看護婦等に對する講習、母の會開催等に因る消極的方面より衞生思想の鼓吹に努め且又肺結核、トラホーム、花柳病、疫痢の豫防に關しては町會其他の團體と協力して萬全の達成を計つてゐる。

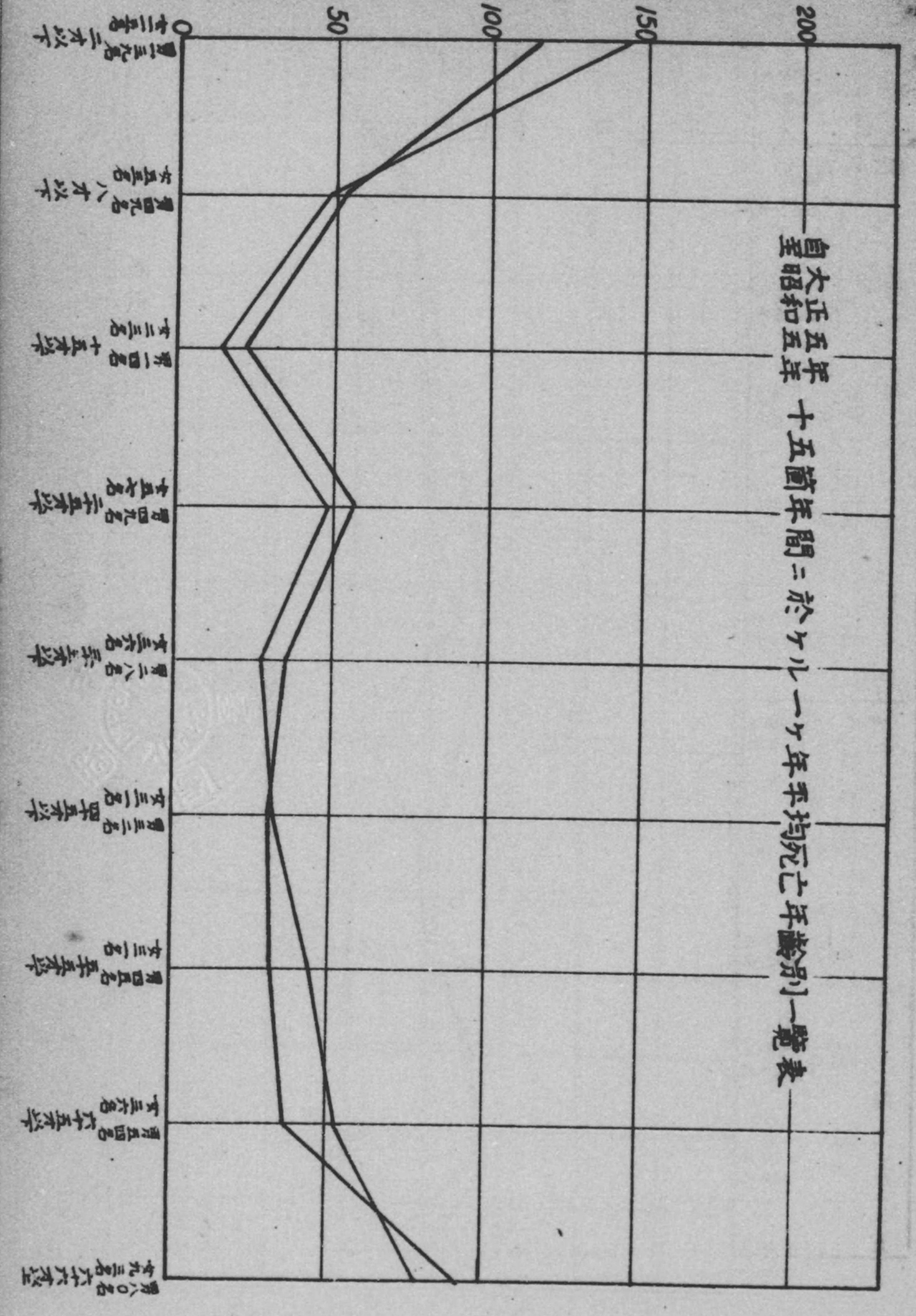
古川沿岸に木賃宿、畜舍が多數散在してゐるのは前述の通りであるが今畜舍の數を集計して見ると（木賃宿は本節營業警察の漸衰營業種目調査表參照）次の如くで之等の不完全な畜舍は其改廢を計つてゐる。

畜舍並飼養家畜頭數統計表

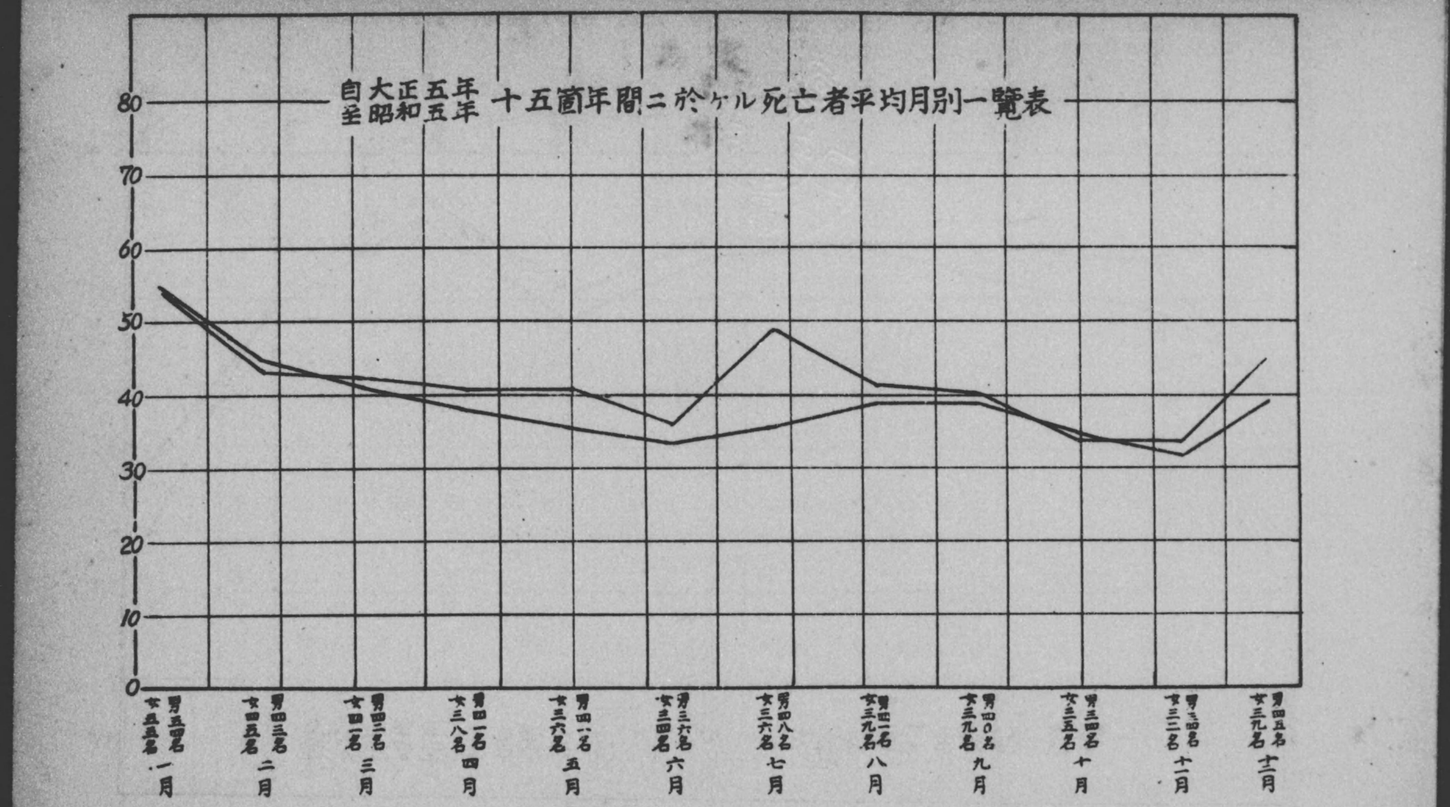
家畜 / 年度	總計		牛		馬	
	畜舍	頭數	畜舍	頭數	畜舍	頭數
大正十五年	24	117	12	4	12	113
昭和二年	12	112	—	—	12	122
昭和三年	11	123	—	—	11	122
昭和四年	11	103	—	—	11	103

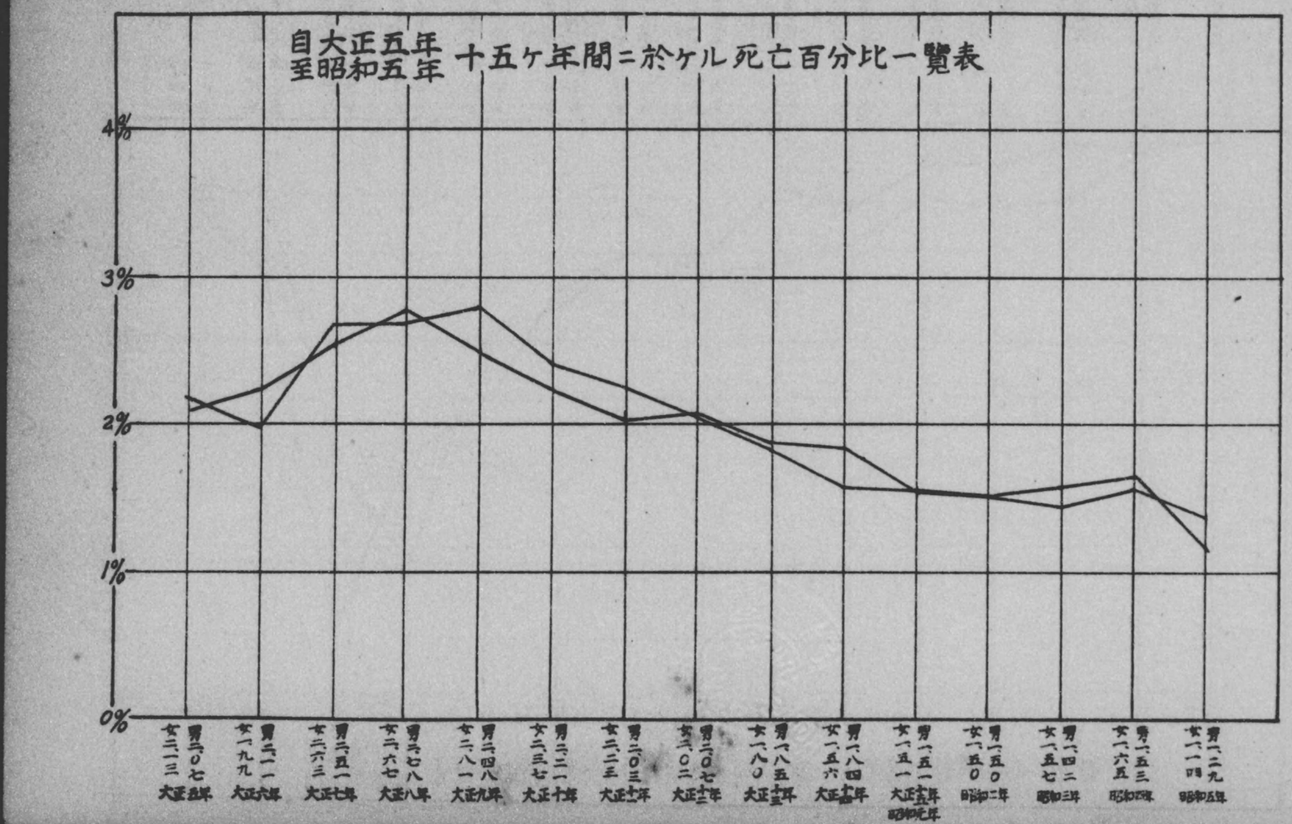
此古川沿岸は又大雨每に浸水家屋多く其浸水地域に對しては消毒方法を指示して傳染病の發生を未然に防止してゐる。今最後に衞生關係取締營業者數表を掲げて此項を結ぶ事にする。

衞生關係取締營業者數 昭和五年 昭和六年 比較表



種別	昭和五年	昭和六年	比較 增	比較 減
美容術營業第一種	六六	六四		二
同第二種第三種	一〇四	九八		六
牛乳販賣營業	一	一		
同請賣營業	一五	一四		一
食肉營業魚肉有店	五七	五九	二	
同行商	五四	六五	一一	
同貝生肉行商	六	一〇	四	
同牛豚肉	二五	二六	一	
同鳥肉	一一	一一		
清涼飲料水製造業	五	五		
貸寢具營業	八	八		
屑物買入場	二	二		
汚物取扱場	一	一		
水槽便所	一一六	一二一	五	
畜舍	四	四		
醫師	一一一	一一一		
齒科醫師	四二	四二		
藥劑師	五三	六一	八	
獸醫師	二	二		
製藥者	二	二		
病院	三	四	一	
診療所	一	一		
病室	二一	二〇		一
氷雪營業	九	九		
藥種商	九	九		
毒藥物營業	二九	三〇	一	
賣藥營業	三三	三四	一	
賣藥部外品營業	二八	二九	一	
賣藥請賣營業	一五三	一七〇	一七	
產婆	三八	四〇	二	
看護婦	二六一	二六九	八	
看護婦會	一〇	一〇		
按摩鍼灸マッサージ術營業	四四	四四		
療術行爲業	四九	四四		五
賣藥行商	三	三		
柔道整復術營業	四	四		
合計	一、三八〇	一、四二七	六二	一五

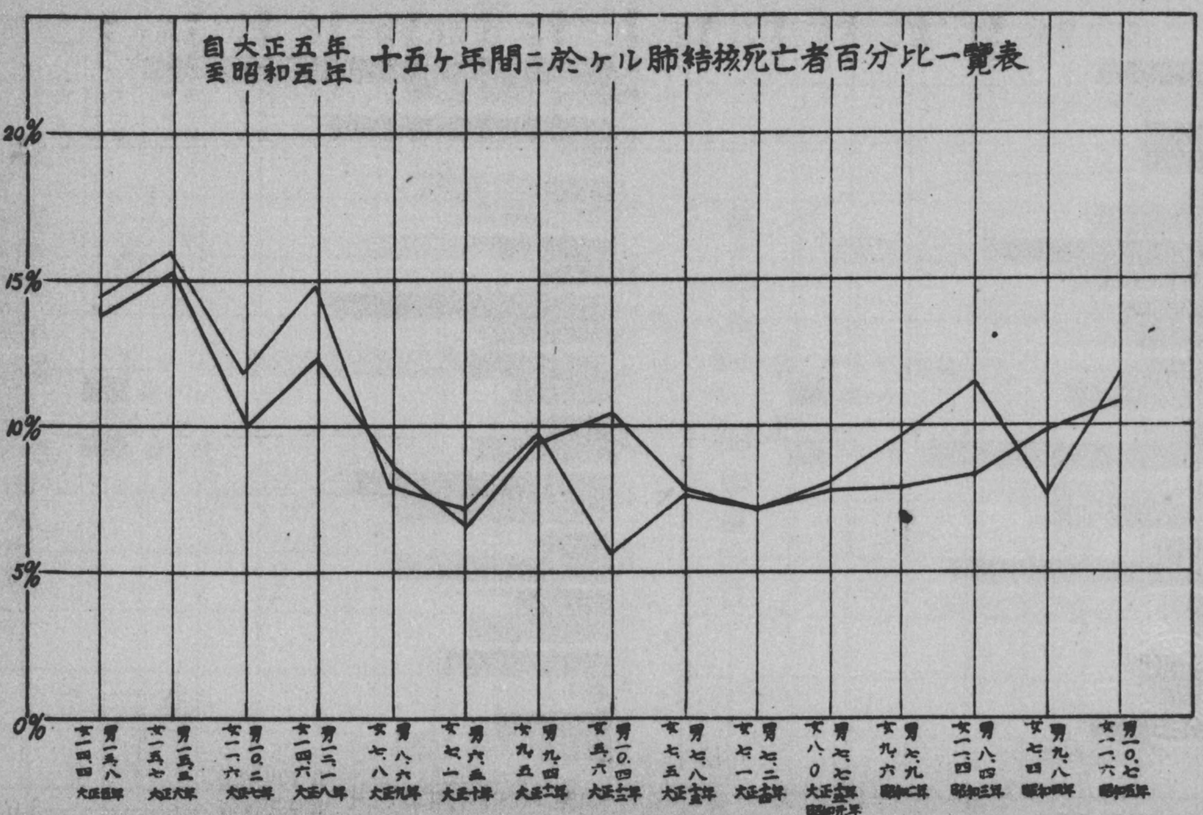

表覽一別月均平者亡死ルケ於ニ間年箇五十 年五正大自
年五和昭至
80
70
60
50
40
30
20
10
0
男五四名 女五五名 一月
男四三名 女四五名 二月
男四二名 女四一名 三月
男四一名 女三八名 四月
男四一名 女三六名 五月
男三六名 女三四名 六月
男四八名 女三六名 七月
男四二名 女三九名 八月
男四〇名 女三九名 九月
男三四名 女三五名 十月
男三四名 女三二名 十一月
男四五名 女三九名 十二月

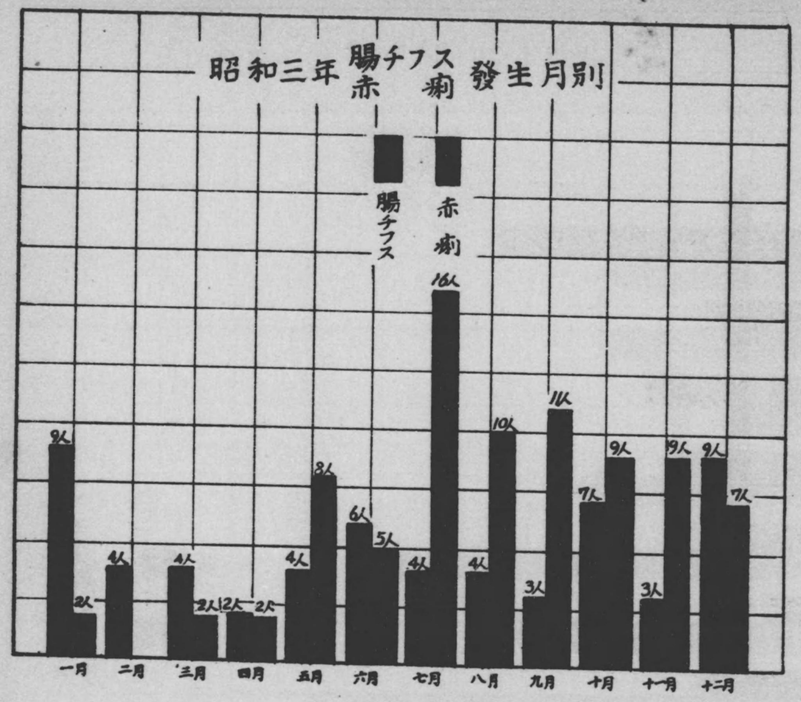

表覽一比分百亡死ルケ於ニ間年箇五十 年五正大自
年五和昭至
4%
3%
2%
1%
0%
男二〇七 女二一三 大正五年
男二一一 女一九九 大正六年
男二五一 女二六三 大正七年
男二七八 女二六七 大正八年
男二四八 女二八一 大正九年
男二一一 女二三七 大正十年
男二〇三 女二二三 大正十一年
男二〇七 女二〇二 大正十二年
男一八五 女一八〇 大正十三年
男一八四 女一五六 大正十四年
男一五一 女一五一 大正十五年 昭和元年
男一五〇 女一五〇 昭和二年
男一四二 女一五七 昭和三年
男一五三 女一六五 昭和四年
男一二九 女一一四 昭和五年

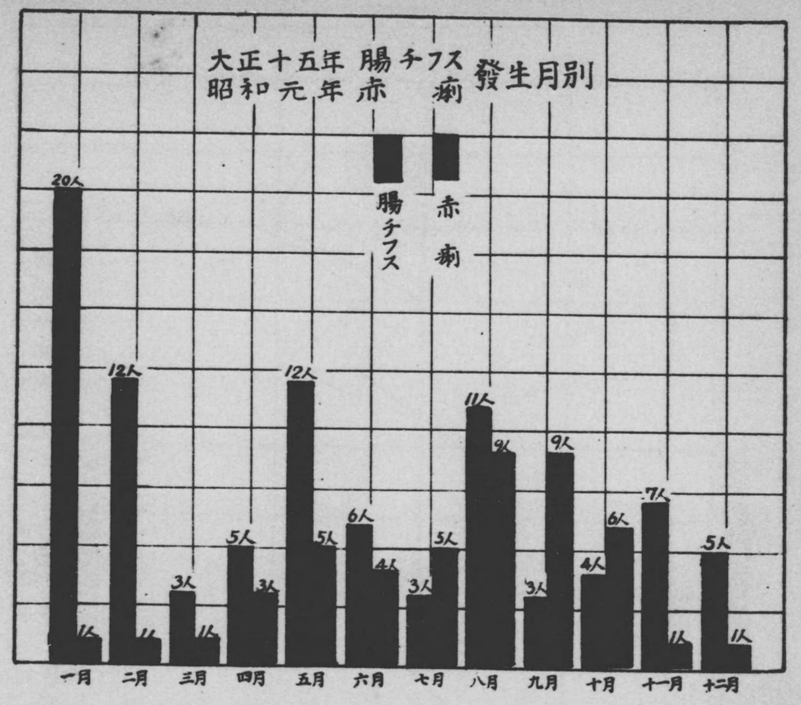
表覽一別齢年均平年ヶ一者亡死核結肺ルケ於ニ間年ヶ五十 自大正五年 至昭和五年

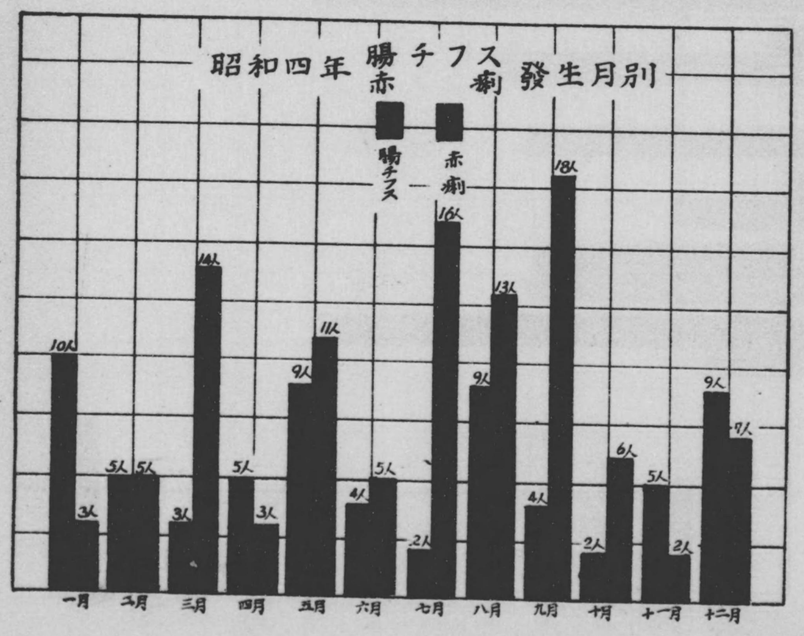
(ルス對ニ人百者亡死)

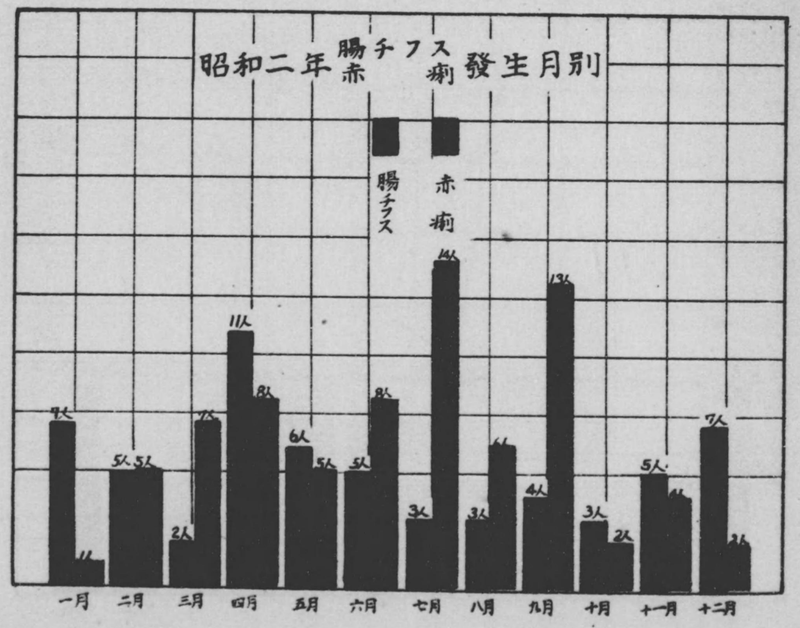
表覽一比分百者亡死核結肺ルケ於ニ間年ヶ五十 自大正五年 至昭和五年

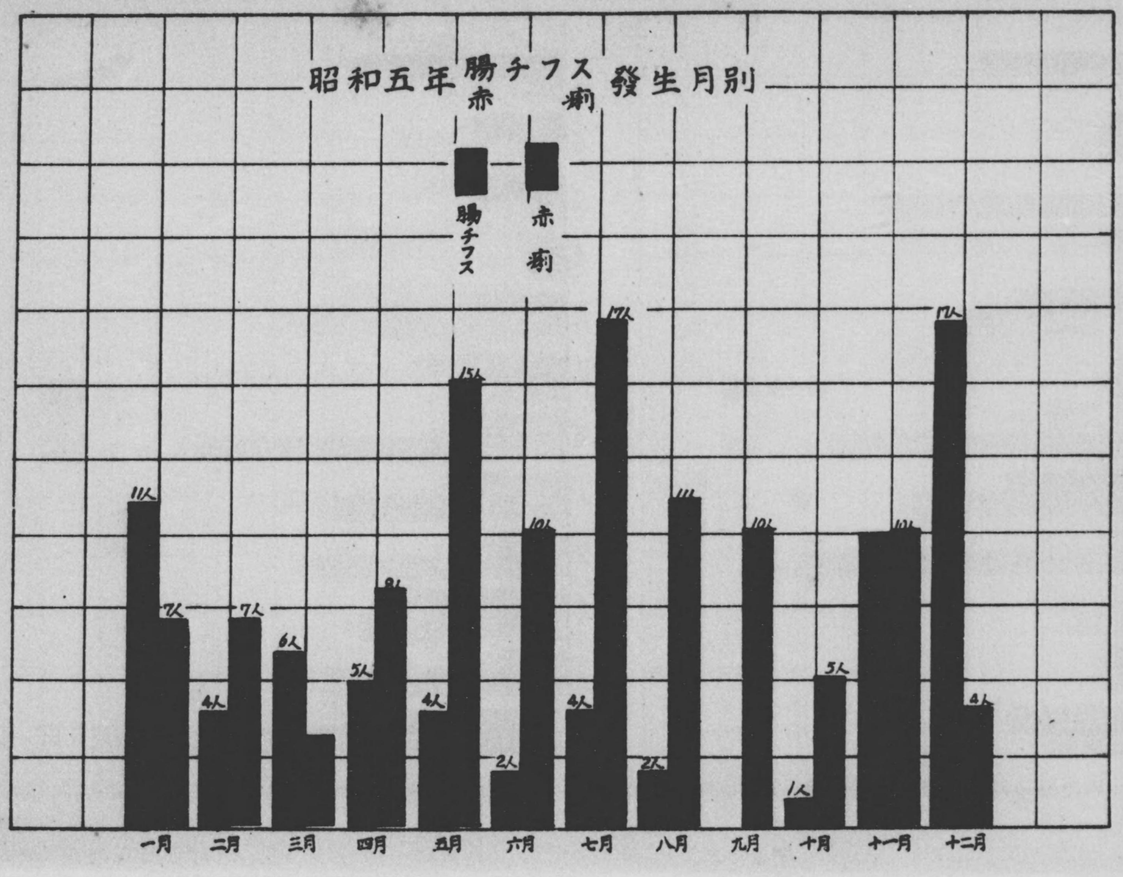



昭和三年 腸チフス 赤痢 發生月別
腸チフス
赤痢
9人 2人 4人 4人 2人 2人 4人 8人 6人 5人 4人 16人 4人 10人 3人 11人 7人 9人 3人 9人 9人 7人
一月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月


大正十五年 昭和元年 腸チフス 赤痢 發生月別
腸チフス
赤痢
20人 1人 12人 1人 3人 1人 5人 3人 12人 5人 6人 4人 3人 5人 11人 9人 3人 9人 4人 6人 7人 1人 5人 1人
一月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月


昭和四年 腸チフス 赤痢 發生月別
腸チフス
赤痢
10人 3人 5人 5人 3人 14人 5人 3人 9人 11人 4人 5人 2人 16人 9人 13人 4人 18人 2人 6人 5人 2人 9人 7人
一月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月


昭和二年 腸チフス 赤痢 發生月別
腸チフス
赤痢
7人 1人 5人 5人 2人 7人 11人 8人 6人 5人 5人 8人 3人 14人 3人 11人 4人 13人 3人 2人 5人 4人 7人 2人
一月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月



左の十五ヶ年及五ヶ年間月別の傳染病に關する統計圖表は本署勤務衞生係補田巡査部長の調査提出に依る非常に興味ある統計資料である。

地誌篇

地誌篇

序說

綠葉に包まれた閑寂な麻布臺地は砂漠の様な市内のオアシスであるが、此綠叢の蔭に祕められた麻布の昔を回顧しながら二十世紀文化の濤に揺られてゐる現代のそれと對照して其地誌の史的淵源の一端に觸れて見よう。麻布由來記・史蹟・名所等の探究は其土地の特異性を知るに必要不可缺のものである。

現代資本主義黄金時代以前の社會に於て寺院は東西世界何れの國に於いても或一定の社會組織に於ける政治、經濟、學術と密接な關係若くは交涉を有し、或場合には夫等の中心ともなつてゐた。期うした文化史的意義を有してゐる寺院を我が管內に求めるならそれは麻布山善福寺であらう。今より約一千五六百年の往古弘法大師が善福寺を開山してから麻布の歷史は展開するのである。實に江戸の麻布は、お寺と屋敷との間に介在して、此處に一町、彼處に二町と言つた様な、門前町式の町が數える程しか出來て居なかつた事が想像され得る。「江戸名所圖繪」の揷畫は廣尾ケ原の秋の

月に狸殿が腹鼓を叩いて興じてゐる。一本松、三軒家は荒涼たる原野に於ける旅人の目標となつた事だらう。斯うして麻布も漸次舊幕時代の町家の起立及明治初年士地寺社地の開放と共に開發して更に市電開通と同時に急激に發展したが、大正大震災は其狀態を一新し凡てが舊きものから新しきものへ轉換されつゝあるが、然し未だ麻布の裏路や大きな邸の庭等には、懐しい昔の面影が殘つて追憶の夢を辿るに適しい所が幾らもある。町名が初めて起立したのは慶長十九年(西曆一六一五年)市兵衛町の起立である。

本管内は大體に於て古の麻布村の大部分、飯倉村、今井村の一部分である。

此江戸の外廓としての麻布は幽邃な地であり樹立の多い從つて蚊の多い所であつた。

時鳥麻布は江戸の外山かな　葛三

秋風の麻布は雲の戸口かな　獲物

物の香も暗し麻布は蚊の四月　宇橋

第一章　麻布、飯倉及今井の名稱的起源

第一節　麻布名義及事蹟

麻布は麻生或は阿佐布とも書いて、其昔麻布の領と稱して、古くは麻布村と呼んだ。村民は麻を闇闇に植て生活を營み、一望悉く麻田であつたので麻布と言ふ。

御府内備考には麻布名義及其事蹟に就て次の如く書いある。『江戸志言、此所(麻布)は多摩川へもほど遠からざれば、古へこの地に麻を多くうへおき、布をもおり出せるよりの名ならん。多摩郡(武藏國)にも布多村といふあり、手調布を多くおり出せしよし。又或人言、あさふは麻布にあらず、此邊昔は山島にて、麻を作りしゆへ、麻田をあさふとよめり、日本記にも豆田粟田をまめふ、あはふと訓ずるがごとく、此外にも遙生又淺茅生の類に同じ、武藏國には調布を玉川にさらして貢物にも奉りしゆへ、此邊麻田なるべし。延喜式萬葉集の歌にものする所なりと。是等の說皆文字にもとづきての牽强にして、その據をしらず。又麻布山善福寺の傳へに、かの山へ往昔麻のふりし事あるゆへ、麻布留山といひしを、中略して麻布山と唱へしより、後年廣き地名となれるなどといへり。これは殊に甚しき附會の說なり。改撰江戸志言、新田系圖をみるに天慶年中(紀元一五九八年——一

六〇六年）平將門の事ありし時、源經基武藏國麻生にあつて將門にしたがはずと言々。又平忠恒朝敵となりし時河內守賴信（源）長元元年（長元四年――紀元一六九一年の誤らしい）十月征夷大將軍に補せられ、鬼丸の御劍を賜はりて、かれを征伐のため下向し、まづ武藏國麻布に到て、坂東の軍兵をまねきあつむと言々。案に天慶（紀元一五九八年――一六〇六年）より長元（紀元一六八八――一六九六年）の間凡八十年の餘なり源經基、源賴信當國（武藏國）に下りし時は、かならず麻布にありしよしのすれば、この所に館も有しなるべし。なれどこゝより西都築の郡（武藏國）にも麻布村などあればいづれの地なりしや正しきをしらず。此餘古書に麻布の名あらはるゝをきかず。江戸古圖には麻布村をのす。』

卽ち、改撰江戸志には新田系圖を引證して、天慶年間、平將門の亂に源經基が武藏國麻生に居つた事を擧げ、更に長元元年十月源賴信、平忠恒を討伐せんとして坂東の兵を武藏の麻布に集めた事を指摘してある。麻布村は西都築郡にも同名の村があるから今其何れの麻布であるかは明かではないが經基、賴信共に來つて麻布に到りたる事から推論すれば、或は源家の館があつた地ではないかと思はれる。

小田原役帳には、江戸阿佐布五十三貫二百文の土地を狩野大膳亮が領してゐた事が記されてあり正保の鄕帳には、『阿佐布村高七百四十五石餘、內百廿八石餘伊奈半十郎御代官所、百三十七石餘山王領、六十六石餘大養寺領、五十八石餘天德寺領、三十八石餘神田明神領、十六石餘柴明神（神明歟）領、屋敷四町五段八畝十五步、上ヶ屋敷伊奈半十郎御代官所、外高十石養福寺領』とあり、又元錄改めの鄕張には、高二百九十六石餘阿佐布町、高十一石餘阿佐布町之枝鄕坂下町と書いてある。

第二節　飯倉名義及事蹟

飯倉村は昔伊勢大神宮の神厨の地で其御饌料の稻を收めた倉を呼んで飯倉と稱した事蹟から起因したのである。現在管內の飯倉町六ヶ町、飯倉片町、飯倉狸穴附近が飯倉村であつた。

飯倉御厨事蹟

今此事蹟について吾妻鏡壽永三年五月三日の條から書拔いて見る。

『三日庚寅（元曆二年――紀元一八四四年――五月）武衞（源賴朝）被レ奉レ寄二附兩村於二所大神宮一。去永曆元年（紀元一八二〇年）二月御出京之刻、感二靈夢一之後、當宮事、御信仰異二他社一。然者、平家黨類等、在二伊勢國一之由、依レ令二風聞一遣二軍士一之時者、縱雖レ爲二凶賊之在所一不レ相二觸事之由於祠官一、無二左右一不レ可レ亂二入神明御鎭座砌一之旨、度々所レ被二仰含一也。謂件兩所者、內宮御分、武藏國飯倉御厨、被レ仰二付當宮一禰宜荒木田成長神主一外宮御分、安房國東條御厨被レ付二會賀次郎大丈生

倫ニ訖。爲ニ一品房奉行一、遣ニ兩通御寄進狀一。——中略——御寄進狀言、

寄ニ進　伊勢皇大神一御厨壹處。

在ニ武藏國飯倉一。

右志者、奉ニ爲　朝家安穩一、爲レ成ニ就私願一、殊抽ニ忠丹一。寄進狀如レ件。

壽永三年五月三日　正四位下前右兵衛佐源朝臣

寄ニ進　伊勢太神宮一御厨一處。

在ニ安房國東條一。

四至如レ舊

右志者、奉ニ爲　朝家安穩一、爲レ成ニ就私願一、殊抽ニ忠丹一。寄進狀如レ件。

壽永三年五月三日　正四位下前右兵衛佐源朝臣　——吾妻鏡——

此外神鳳抄に左の如く記せられてゐるのは此御厨である。

武藏國(節二)

飯倉御厨　當時四貫文

飯倉御厨　長日御幣五十丁

尙江戸砂子には飯倉に付いて次の如くある。

「ある人の云、此所(飯倉)はむかし宮倉あり、其所に社建、よつて飯倉神明といふ。〔舊記曰〕宣化天皇爲レ民設ニ干諸國穀倉一、救ニ洪旱一也と、此穀倉の事なるべし。」

新篇武藏風土記稿には「飯倉ハ古キ地名ニテ、往古伊勢神供又ハ貢稻ヲ納シ屯倉を置レシ跡ナレバ、此名起レリト言。或人云、文武ノ朝貧民ヲ敎ハンガ爲ニ諸國ニ義倉ヲ置ク。コレ其跡ナラント。兎角穀倉ノ跡ナルコトハ知ラル。」と在りて、江戸名所圖會には「此地は往古伊勢大神宮の神厨の地なりし故に、其御饌料の稻を收めし倉を飯倉と唱へ、いつしか地名に呼ばるなるべし。」と見ゆ。御府內備考續編には「武藏國豐島郡日比谷鄕之內神明宮之地者、往古より五穀豐饒之處にして、人王二十九代宣化天皇の御宇諸國郡縣に屯倉を設けて、穀を運移し、民の洪旱を救ひ玉ふ。其穀倉のありしゆへに、民俗稱して飯倉領と號す。是によつて土民此所にして飯を扱ふ器を專に製す。臼杵鉢餅器等なり。千器はいにしへ藤の蔓にて編み器となし、餅を盛によつて餅器の語上略して千器と呼ならはし、此餘風今に殘りて、當社祭禮之比、社邊の商人飯櫃形の器に藤を畫き、菓子等を盛りて鬻も此謂なり。其外菓生姜土地の產物作出せしにより、一條院御宇寬弘二巳年(紀元一五六六

年）九月二十一日兩宮御鎭座の御祭禮に、菓生裳海邊にて魚鱒等を供御にそなへ、又醴酒を作り、その品々を干器に盛て奉し故に、今なほ其古記例によつて年々九月祭禮のころ古生裳菓等、近邊海人魚鱒を持運び臼杵木鉢餅器を製しあきのふ事誠にいにしへの餘風、此地此器に傳り繁榮し群集なすこと、御神德あげてかぞふべからず。」

之等諸說の內神厨の穀倉が有つた事より得たる名とする說は、多少の疑がないでもない。何故ならば。此地の御厨と爲つたのは、實に源賴朝の寄進に依る者であつて、吾妻鏡の文意から推察すると、飯倉の名は寄進以前已に存在してゐた樣であるからである。勿論飯倉神明宮（江戶名所記日比谷神明とあり、今俗に芝神明と稱す。）は舊と增上寺の境內飯倉天神の社地に在つたと言ひ、或は三田小山神明宮の社地に在つたとも傳へられる。

〔註〕

江戶砂子に云ふ『當社（神明宮）舊地は、今增上寺の山際なり、よつて其地を飯倉山と言ふ。』江戶名所圖會に『飯倉神明宮——中略——其舊地は增上寺境內飯倉天神の社地なりと。或云赤羽の南小山神明宮の地なりとも。』

此傳以下皆一條帝の寬弘二年乙巳（紀元一六六五年）九月十六日を以て鎭座の時とするなら、賴朝前神厨の穀倉無かりしとも斷定し難い。唯神明社を寬弘二年（紀元一六六五年）の創建と爲す者傳說の外徵證なく、却て江戶紀聞が『伴部八重垣翁云、凡神明と稱する御宮は、伊勢國皇太神宮を直に

勸請し奉る事を憚りありとて、御影遷の意にて移し奉ると。此地（飯倉）も神領なりしかばかの影遷の意にて、かく神明をあがめまつりしものなるべし。さもあらんに、一條院寬弘年中（紀元一六四四年——一六七一年）よりは遙かに後の事なり。』と記されてあるのも充分其理由がある。

神厨說は恐らく眞實ではないだらう。義倉說も其證左なきこと、神厨說と同樣である。强ひて言ふならば、御田の穀倉所在地であつて夫から得た名とするのが幾分でも其意義が判然としてゐる。飯倉神明宮の故地と稱する小山邊は今も三田の內に屬し、增上寺境內飯倉天神乃至今の飯倉町邊は皆其隣接地である。或は實に、王朝の御田鄕內であつたかも知れない。武藏國造笠原使主獻ずる所の屯倉中、多米或は荏原郡大井（武藏國）ならば此邊又其一部で飯倉卽ち屯倉の地であつたかも知れない。江戶氏の族に飯倉氏の有ることが畠山系圖に見え、小田原業所領役張には、飯倉彈正忠が在る。飯倉之內櫻田とも見え元龜二年（紀元二二三一年）七月廿八日遠山政景出す所の吉祥寺文書には飯倉鄕となるが其讀域は相當廣かつたものらしい。

尙小田原役帳には、飯倉彈正（ダンジヤウノセウ）忠飯倉の內二貫八百七十文を領し、太田新六郎寄子（ヨリコ）同じく飯倉の內小早川十四貫文を領し、島津孫四郎又飯倉の內善福寺分三十八貫百五十文を領すと載つてゐる。府內備考に據れば吉祥寺文書中、遠山左衞門太夫政景（マサカゲ）が元龜二年七月二十八日の寄進狀中飯倉鄕の內六貫文を寄進した事を記し、其內三貫三百文は前々より箕輪大藏が寄進に係ることを記してある。

正保の改には高百四十九石七斗六升飯倉村と在る。

第三節　今井名義及事蹟

市兵衛町、仲町等の附近は昔の今井村で、其名は今も尚六本木署管内の麻布區今井町に殘つてゐる。

今井村は府内備考中に記載せられてある所の今井町書上（カキアゲ）に『往古木曾義仲の臣今井四郎兼平之居城有レ之候に付、今井と唱候由、古城跡の儀は、當時赤坂讀松平安藝守樣御中屋敷に相成（アヒナリ）て今兼平太刀洗（タチアラヒ）之井と申候は、右御屋敷赤坂新町四丁目里俗新店（シンダナ）と唱へ町家裏に古井御座候』とあるが果して然るや否やは他に確證もないので今知るすべもない。小田原役帳には、江戸今井廿七貫五百文渡邊丹後之を領すと記し、江戸今井伊佐分九貫八百文太田新六郎寄子（ヨリコ）之を領すとある。正保の鄕帳には百二十二石七斗一升七合とある。

此等麻布、飯倉、今井、の各村は徳川幕府の初、多く村部として存し後諸候の別邸を置かれ次第に町家の起立を見、現在の狀勢にまで進展し來たのである。

第二章　市　街

本管内土地の大部分を構成してゐる高燥なる臺地は、江戸時代より所謂「山の手」として諸候の邸宅多く、今日に於ても殆ど上中流階級の住宅地として存して居る。試みに麻布區全體の一人當住宅坪數を見れば、四坪七合に當り、十五區中嶄然首位を占めてゐる。

されば本管内の持つ地方色には、自ら一種の高級住宅地に於ける靜けさと高さが漂つてゐるが、本所、深川の如き下町地區に見受け得るが如き動きとあはたゞしさはない。

乍然古川沿岸地帶は土地低く、交通便にして管内中の下町方面として各種工場、商家は殆んど此方面にあつて本管内の生産地帶となり、又一方下層階級の住民も比較的此方面に多く各種犯罪發生地として本警察行政對象の主要地を形成してゐる。

坂下町、網代町、山元町、宮下町、新網町附近は集團的商業地域として存し、卽ち東京市都市計畫の指定に依る商業地域は、一、網代町の全部、二、坂下町、山元町、新廣尾町一丁目の一部、此坪數三萬二千坪である。路線的商業地域としては、同新網町一丁目九番地ノ三先より坂下町を經て山元町に至る路線があり、古川沿岸地は言はゞ（本管内には東京市都市計畫の指定に因る工業地域

はない)、路線的商工業地域に屬し、此等の地域中に各種工場が散在してゐる。

本署管轄區域は麻布區全體五十三ケ町の內四十一ケ町より成り、其町名は左の通りである。

北東部

飯倉一丁目	飯倉二丁目	飯倉三丁目	飯倉四丁目
飯倉五丁目	飯倉六丁目	飯倉片町	飯倉狸穴町
森元町一丁目	森元町二丁目	森元町三丁目	北新門前町
新網町一丁目	新網町二丁目	新網町二丁目	永坂町
南日ケ窪町	東鳥居坂町	鳥居坂町	市兵衞町一丁目
市兵衞町二丁目	仲之町	我善坊町	

南西部

三軒家町	廣尾町	田島町	富士見町
盛岡町	本村町	西町	一本松町
坂下町	山元町	東町	竹谷町
新堀町	網代町	宮本町	宮村町
新廣尾町一丁目	新廣尾町二丁目	新廣尾町三丁目	

今一ノ橋より南日ケ窪に通ずる所謂十番通りを境界とし管內を北東部と南西部に分けて各町の概況を述べる事とする。

第一節　北東部

飯倉町

昔の飯倉村の內である。東は芝公園、芝榮町に堺し、北は芝西ノ久保八幡町及區內我善坊町に隣し、西は仲ノ町、飯倉片町、狸穴町に接し、南は森元町一、二丁目に連つて赤羽河岸に臨んでゐる。東南は平坦で、西北は突如として丘陵地である。今本町六ケ町を夫々分說する。

飯倉町一丁目

虎の門より品川に至る道筋に當つて寬文以前次第に町家となり、明治五年附近の寺地を合併した。隣町には八幡社があるので八幡前とも呼ばれる。本町の北境に飯倉一丁目停留場がある。番地は一番地より十二番地迄である。此町にある「三つ星」は明治初年に開業した最初の牛肉店の一つであると云ふ事である。

飯倉町二丁目

一丁目の南に接して一番地から二十三番地迄ある。明治五年附近の土地を合した。町北に一丁目

より六丁目の横に抜る——自二丁目三番地至六番地——坂に雁木坂があつて元は我善坊町に入る本道であつた。

石磴二十八級石雁木で出來てゐるので雁木坂と呼ばれる。『岡山地方ではガンギとは階段を意味するさうだ。此坂は段々になつてゐるのでガンギ坂と呼ぶのだらう。』と島崎藤村氏は書いてゐる。三丁目との界に芝榮町より六本木に通ずる横路があつて十字街を成して今でも四ツ辻と呼ばれてゐるが現在は五ツ辻の樣になつてゐる。此處は電車軌道の分岐點であり飯倉二丁目の派出所がある。此處より六本木方面へ向つて上る坂を榎坂或は金丹園坂と呼び、昔大榎があつた。芝榮町に通じてゐるのを永井坂、飯倉五丁目へ下る坂を土器坂と稱する。

飯倉町三丁目

二丁目の南境に三丁目がある。一番地から三十番地までである。往時瓦器を製するものが多かつたので今尙土器町とも云ふ。明治五年附近の士地社寺地を合した。

西側の熊野神社へ通ずる路を熊野横町と言ひ、町内には東京天文臺、飯倉郵便局、日蓮宗眞淨寺、滿鐵總裁の社宅、風月堂菓子工場がある。

飯倉町四丁目

三丁目の東南に隣接して一番地より二十二番地までである。明治五年附近の士地寺地を合併して市

街を形成した。五丁目との境界に飯倉四丁目停留場があつて、電車通東側の路を入ると私立東京實業女學校、私立小幕幼稚園があり、更に管外の芝公園に一歩其足を印すれば紅葉館、水交社等の建物がある。

飯倉町五丁目

四丁目の東南に五丁目がある。一番地から六十番地までである。明治五年附近の士地開墾地を合した。昔小野川喜三郎が化猫を退治した所だと言ふ赤羽根橋は本管內の最東端にある。此赤羽根橋の北詰を廣小路と言ひ又沿岸の地を「ちよろ」河岸と言つてゐたが現在は北赤羽河岸と稱して、此處に東京市水道局赤羽根出張所、飯倉尋常小學校がある。本町の南境に流れてゐる古川は此邊りに於て赤羽根川と呼ばれ、此北岸には其昔河原に於て看市が立つて頗る繁昌し多くの茶店などあつた事が江戸名所圖繪に見える。現存の瓦屋は其當時から存續してゐると云はれる。赤羽根橋北側芝公園への入口には飯倉五丁目派出所がある。

飯倉町六丁目

二丁目の西にあつて、一番地から二十五番地までである。明治五年米澤藩上杉氏、臼杵藩稻葉氏の邸を合した。電車通を隔てゝ狸穴町と相對し、曾ては紀州藩德川侯の邸宅が町內の大部分を占めて居たが現在は他に移轉した。貯金局、中華民國公使館、南葵文庫等がある。近世式四層樓の貯金局

が飯倉驛上に堂々と其威容を横へてゐる様は蓋し本署管内の一偉観である。本町内は上述の建物に依つて其大部分を占められてゐるから住宅は少い。南葵文庫は明治三十二年創立、四十二年公開主として日本歴史、日本地理、國文學に關する圖書が多かつたが震災後帝大へ寄附となつた。

飯倉片町

南は永坂町、東は狸穴町北は飯倉町六丁目及仲ノ町に隣し、西は東鳥居坂町に接してゐる。地勢高く十九番地附近は海抜二八・四米で、狸穴町との境界の邊りは多く崖地を形成してゐる。番地は一番地より三四番地迄である。

昔の飯倉村の一部で、延寶年間の頃既に市街となつて片側町であたので片町と言ふ。明治五年長岡藩牧野氏邸及大田原藩大田原氏邸其他近傍の土地を併合した。狸穴町の狸穴坂と併行して狸穴町へ下る楠木坂は昔鼠坂とも呼ばれた。嘉永年間の頃には此邊に有名な菊畑があつて植木屋が多數居住し、盛んに菊人形を作つたものらしい。永坂上の岡邸内には「岡の櫻」或は「朝日櫻」と稱する樹齢約二百五十餘年に達する櫻の老樹と周圍一丈二尺、高さ八丈五尺、樹齢二百四十年の公孫樹の老木がある。

麻布に古くから、其名を謳はれてゐたお龜團子は初代治郎太夫より龜團子を引ついだ二代三河屋平八が今の樺太廳員出張所の處にあつて凡そ百二十年間營業を續けてゐたが明治初年廢業して其後先代とは關係のない三代目おかめ團子が東鳥居坂に開業して相當繁昌してゐたが之も明治四十年頃廢業して終つた。現在の鳴門壽司は麻布名物の一つである。文壇の耆宿島崎藤村(春樹)氏は三三番地に住んでゐる。氏後期の傑作「嵐」は此家を中心として起つた事を取扱つた小説である。藤波茂時子、有賀長文(三井銀行重役)、鈴木隆(代議士)氏がゐる。

飯倉狸穴町

東は飯倉町三丁目に對し、西は飯倉片町の一部並に永坂町に連つて南は森元町一丁目に面し其南西の一角は新網町一丁目に接し北は大路を隔てゝ飯倉六丁目に臨み、其地勢は高低激しく大體に於て窪地をなしてゐる。番地は五九番地までである。窪地の北部は閑雅な住宅地として昔の麻布が偲ばれるのも嬉しい。

狸穴町は古の飯倉村に屬して、狸(まみ)の穴があつたので狸穴と言ふ。延寶の頃一箇町となつて獨立し、明治五年三春(みはる)藩秋田氏邸及土地を合併した。電車通に面して靈ケ關より昭和五年新築移轉したソヴエート大使館がある。赤い國とは反對な眞白な建物で、貯金局と相對し此邊り近代的風景がマロニエの街路樹に戰いでゐる。狸穴坂を下りつめた所に狸穴町巡査派出所がある。此派出所の附近は標高海抜七・九米である。昔明治二十九年に未だ遞信省通商局長であつた田健次郎が三十四番地に其居を構へてゐた事が本署の書類にある。

森元町一丁目

東飯倉町五丁目に、西は狸穴町の一部に接し、南は北新門前町と其堺を交へ、北は飯倉町三、四丁目に連つてゐる。番地は一番地より二十八番地までである。元和年間幕府留守居同心白幡小平次等十餘人の宅地を下谷の内に與へたが、元綠十一年用地となつて此處に移る。町名の起源は增上寺の森下に在るので森元町と呼ばれるに至つた。明治五年新庄藩戸澤氏邸及附近の士地を併せて之を一丁目とした。元芝區に屬してゐたが明治十三年九月本區に編入せられた。

本町には明治以後盛元座、高砂座、曙座の三劇場があつたが今は跡方もない。二十七番地の秋葉神社(戸澤邸跡)の神木びやくしんは周圍一丈、高さ五丈、樹齢約二百年餘を經てゐる。

森元町二丁目

二丁目は一丁目の南角に位し、赤羽根河岸と相對して、一番地より二十九番地までである。土地は平坦で赤羽根川町南を流れてゐる。明治五年幕府の被官地及士地を合併した。

森元町三丁目

二丁目の西に在つて新門前河岸の一部に連つてゐる。元幕府賄方組屋敷であつたが明治五年合併した。一番地より十五番地までである。

北新門前町

東は森元町に交錯し、西は新網町一丁目と相對し、南に新門前河岸を擁して北は森元町一丁目と狸穴町の一角に接し、一番地より十八番地までである。

初め芝區北新門前町とともに一町で、元築地同朋町代地及南新門前町一丁目二丁目の代地であつた。其內同朋町は將監橋外西側にあつて馬場地であつたが貞享年間以後漸次拜領地となつて築地同朋町(芝新馬場同朋町とも言つた)と稱し、享保十四年用地となつて外に移り、文化三年又此處に移つたものである。

其新門前町は元綠十一年同朋町の西にて增上寺の拜領地となり文化三年火災後此に移つたものである。明治五年、以上三町及京極氏別邸其他の士地を合し舊稱を以つて町名とし、町の南端(中ノ橋から新門前橋の間)を新門前河岸、其西を薪河岸(古川の屈折せんとする附近)と呼んだが赤羽根川を堺として之を芝區及麻布區に分屬せしめ、麻布區に屬する部分に北の一字を加へて北新門前町と言ふに至つた。

町內には麻布冷藏製氷株式會社、東京飼料株式會社等、其他小工場散在し、平坦な町である。

新網町一丁目

東は狸穴町の一部に隣りして更に道路を隔てゝ北新門前町と相對し、西は永坂町の一部に、南は薪河岸に境して、北に永坂町の丘陵を負つてゐる。一番地より七十二番地迄ある。

昔麻布村の原野地で、享保十四年芝新馬場の代地となり、後町家が起つて、十番馬場町と稱した地及本町二丁目の代地、其他士地であつたが明治五年合して一町とした。

府內備考に曰く。

當町起立の儀は元地芝新網町切地之廉に申上候通。寶永四亥年七月中。御用地に被二召上一。松平美濃守樣御屋敷に相成候に付。麻布堀留物揚場際伊奈半左衞門樣御代官所麻布本村分明地にて。七割の增坪を以て御代地被二降置一。則麻布新網町と相唱申候。

此邊りを十番と稱するのは、元祿十一年新堀川浚渫の時役夫割當の十番榜示杭が殘つてゐた事から起つた名稱である。卽ち、金杉川口から澁谷迄川浚の爲土持運びの人足番組を一番より十番迄に定め、番組印の幟を立てゝ土の持運びをしてゐたが、その十番目が丁度今の十番の所に當つてゐたのである。

新網町二丁目

一丁目の南、新河岸の西に在つて、網代町に接し四方道路に圍繞され町內に十字の小路がある。

番地は一番地より十七番地である。八番地に於ける標高は海拔六・九米である。

元麻布村の荒蕪地であつたが、寶永四年新網町一丁目の代地となり、享保八年其內を分割官收して植木屋某に貸與したので開いて市街とし飯倉新町と稱してゐたが明治五年又併せて本町と成したのである。

永坂町

大半丘陵で其一部南西の方向は稍低く、東は狸穴町、西は東鳥居坂町、南は新網町一丁目、二丁目及宮下町の一部、北は飯倉町に隣してゐる。一番地より七十一番地まである。

昔麻布村の內にあつた此處に長い坂があるので永坂と言ふ。永坂は元長坂と書いた。惣鹿子にも「麻布より芝筋に行くに此坂譏に長ければ名附けて長坂と言ふなるべし」と出てゐる。又長坂氏が居住してゐたので斯くの如く呼ぶとの說もある。坂路百六十間で市內でも有名な坂である。

又越さむ袖の長坂秋近し　　支　考

寶永六年市店を設け俗稱を取つて町名とした。明治五年舊藩松平氏別邸及光照寺門前其他士地、社寺地を合併した。町內には竹長稻荷、カナダ婦人傳道會社、永坂ホーム、更科等がある。其他池田成彬(三井銀行取締役)、結城豐太郎(興銀總裁)、三井守之助(三井銀行頭取)、和田嘉衞、葛城茂實伯、毛利元秀子等諸氏知名の人が多い。

更科は麻布第一の名物である。更科は元祿時代からのそばやで其名が知られて來たのは文化文政の頃からである。明治初年頃は未ださゝやかな蕎麥屋であつたが、其味其汁が持つ獨特の風韻は更科をして東京一の蕎麥屋たらしめ、初代布屋太兵衞から實に三百年も續いたと云ふ。天ぷら蕎麥が有名になつたのは明治以後の事で昔は種物は作らなかつた。更科の庭奥の高所に在る更科稻荷は三田稻荷、世繼稻荷、高稻荷、或は長坂稻荷と呼ばれた此稻荷神社は寛文二年六月坂上の甲府宰相綱重公の館の鬼門除として祠られたものである。

更科の蕎麥はよけれど高稻荷
森を睨らんで二度とコン〳〵

蜀山人

南日ケ窪町

鳥居坂町の丘陵の南麓に沿へる一帶の市街地で宮村町と宮下町に相對してゐる。一番地より二十番地迄ある。

麻布村の一部で、土地が凹陷して恰度陽を受けるので初め日南窪（ヒナクボ）と言つたが其後轉訛して日下窪となり南北に分つて町名とした。麻布區醫師會施療部がある。

東鳥居坂

東永坂町に對し、飯倉片町と屈曲して相交り、西は六本木町の一部と鳥居坂町に面し南は宮下町に接し北は飯倉通りの大路を隔てゝ市兵衞町二丁目に向つてゐる。

古くは麻布村の內であつたが侯第士宅となり度々變換したが維新の際は福江藩五島氏邸、松本藩戸田氏別邸其他士地であつた。明治五年之を合し、鳥居坂の東にあるので東鳥居坂町とした。永坂町との界に於多福坂がある。於多福坂を下つて右に登り、鳥居坂上に出る坂に汐見坂がある。一望遙かに品川沖を望む事が出來るからである。日清戰爭で有名な大鳥圭介（當時公使）の邸は九番地に在つた。町內は殆んど高燥な邸宅地で坂路多く綠樹の蔭にはブルジョア風が爽やかに薰つてゐる、麻布尋常小學校、東洋英和女學校、日本メソジスト教會其他山尾三郎子、實吉安純子を初め京極、本田、高木の諸子男爵、麻布二郎（日銀理事）、熊本利平、小田良治諸氏の豪壯なる知名の邸宅門を連ねてゐる。

鳥居坂町

東は、小路を隔てゝ東鳥居坂に臨み、其東南の一角は突出して直ちに堺を交へ、西は北日ケ窪町を俯瞰し南は南日ケ窪町を擁し北は六本木町へ聯絡する。一番地より五番地までである。

町の東境にある鳥居坂は平均勾配八分の一の急坂である。昔時、坂の上に鳥居左京亮（サキヤウスケ）の邸地があつたのが鳥居坂の名稱的起源とも云ひ或は稻荷の鳥居があつた爲であるとも傳へられてゐる。江戸曆には「蒼氷川神社の鳥居ありしを以て鳥居坂と言ふ」とある。昔此町に德川綱重公（甲府宰宮）の館

が在つた。維新の頃、多度津藩京極氏邸及士地等であつたのを明治五年坂名を取つて町名とした。町内は粋奇と豪華を極めた岩崎小彌太男、川崎八郎右衛門、門野幾之進、末延道成諸氏大邸宅を以て其大部分を占有されてゐる。

鳥居坂日永の花でありにけり　暮雨

此鳥居坂に戸川內膳といふ旗本があつた。寛永の切圖に依ると上つて中程の左り側に戸川充之助の屋敷がある。此話は先代頃の物である。或年此屋敷から火を失し、火事は僅な物であつたが燒死人を數多出した。すると翌日板橋ひに、こんな落首が貼り付けられた。

此火事に人の命を鳥居坂
これより上の戸川內膳

すると又次の返歌と思ぼしき物が貼付けられた。

此火事に人の命を鳥居坂
　怪我の事なら戸川內膳

此返歌の作者は白川樂翁が未だ十二三歳の頃、田安御殿に在つて前の落首を聞かれて詠んだものとも云はれて居る。（以上山崎紫鳳氏の「麻風の狂歌と落首」より）

市兵衛町一丁目

市兵衛町一、二丁目は南は仲ノ町、東鳥居坂町及三河臺町に、西は今井町、簞笥町、北は谷町、赤坂區霞南坂町、東は我善坊と芝區西ノ久保葵手町、門城山町に堺してゐる。地勢高低激しく其西北部は犬牙の如く交錯してゐる。一番地より十八番地までである。

元南部氏（八戸藩）、大久保氏（荻野山中藩）、本庄氏（高富藩）三邸及士地であつたが明治五年之を併合して隣町の名を藉り一丁目とした。本町から谷町へ下る二條の坂に紅葉屋敷坂と御組坂がある。前者は市兵衛町十一番地の所から谷町通りへ下る坂で後者は靈南坂通りから谷町へ下る坂で昔お先手組屋敷があつた。古く此處には伊藤源太なる人が住んでゐて楓樹の多かつた所からこの人の屋敷を紅葉屋敷と稱した。東久邇宮邸は元麻布御用邸であつたのを御下賜になつたもので、西班牙公使館、住友邸があり、明治大正の文壇に輝しい功蹟を殘した巨星永井荷風（壯吉）は六番地に居を構へてゐる。

市兵衛町二丁目

昔時今井村の內に在つた。其北部は承應年間今井臺町と稱せられたが、元祿八年開創者黒澤市兵衛の名を取つて市兵衛町と改め、南部は元祿九年坂江町代地となり亦市兵衛町と呼んだ。維新後附近の石川氏（下館藩）邸不動院門前及士地寺地を合して本町とした。番地は一番地より八十九番地までであるが其中二十一番地から六十三番地までは六本木署の管轄である。

不動院門前は俗に六軒町と呼び、不動院東北の崖地即ち四十八番地と二十六番地の間の横町を入つた坂の下の低地を丹波谷と言ふ。簞笥町に下る柳海軍少將邸の脇の坂を柳の段々、町西今井町に下る坂を市兵衛坂又は幸國坂、本町から今井町と簞笥町との間を赤坂氷川神社へ下る坂を長垂坂、

及市兵衛町二丁目二十五番地の所を西北に市三坂へ出る坂を寄席坂と言ふ。麻布區役所、有限責任麻布區商工信用組合、馬越同族株式會社、馬越幸次郎(エビスビール社長)邸、財團法人原田積善會は本町に在る。町の西端は六本木の大十字路に臨んで繁華な商業地帶である。

仲之町

地形殆ど正方形南は飯倉片町東は飯倉六丁目に堺して北と西は市兵衛町二丁目に包まれてゐる。一番地から二十五番地までである。

元仲町と呼ぶ士地であつたのを明治五年一町とした。町内には麻布尋常小學校があり、文部大臣田中隆三、故北里柴三郎男、牧野元治郎(不動銀行頭取)、星光(富士製紙社長)諸氏が居を構へてゐる。

我善坊町

飯倉六丁目と市兵衛町との中間に位してゐる低地で芝區西ノ久保に連り、南は飯倉六丁目、西は仲ノ町の一角に接し北は市兵衛町一、二丁目の高丘を受け、東は西ノ久保八幡町である。一番地より五十番地までである。

昔、我善坊谷と稱して組屋敷であつたが明治五年町名とした。元、增上寺の屬地で、德川二代將軍夫人淺井氏の茶毘(ダビ)所を設け柩を置いて其假堂を龕前(ガンゼン)堂と呼んでゐたのが轉訛して現在の名を呼ぶに至つたものである。市兵衛町一丁目、東久邇宮邸に上る細い急坂を我善坊坂と言ひ、此坂下から續いて反對に飯倉六丁目十三番地に登る坂を三年坂と言ふ。比我善坊町は實に靜かな落ち付きのある谷底の町である。此處は昔は與力屋敷であつて、其當時は盜賊や罪人を追跡するには此町へ追ひ込むやうにしたものであると言ふ。我善坊へ追ひ込みさへすれば此地勢が捕縛するに便利であるし與力屋敷のことゝて其處には與力達が待ち構へてゐるし、大抵の犯罪者は難なく逮捕されたものであると言ふ。」——以上島崎藤村の「飯倉便り」より。

第二節　南西部

三軒家町

南面して恰度蝶形を成してゐる。東は宮村町に連り、西は笄町の一部に、南は本村町に、北は櫻田町に接してゐる。番地は一番地より五十八番地までゞある。

麻布村の內に在つて昔民家が三軒より無かつた落莫とした寒村であつた。

どびろくの田舍となりぬ三軒家　鳴雪

三軒家の名は此處から起源したが、嚮くは三軒谷とも呼ばれて明治五年幕府賄方組屋敷趾を併せたが昔からの屋敷町で今も其面影が殘つてゐる。三軒家の通りから宮村町へ行く橫町を其昔座光寺橫

町と言つて此處に旗本五人男の一人本所割下水の住人として有名である座光寺源三郎の屋敷があつた。今の後藤邸の横に當る。當町より笄町に下るを中坂と言ひ北條坂と紺屋坂との間にある。本村町の西を西に下るのを北條坂と言ひ昔北條相模守の下屋敷があつた。故後藤新平伯の邸宅は本町と六本木署管轄櫻田町とに跨つてゐた。現在は徳川義親侯が假寓して居る。

廣尾町

東及東南は盛岡町に、北は笄町に、西は廣尾川を隔てゝ市外澁谷町に、南は富士見町に隣接して、番地は一番地より七十九番地までである。

昔麻布本村の一部及澁谷村の一部に屬してゐた。寛文八年漸く商家が出來て來たが元は平屋と稱する茫々とした原野であつた。明治五年堀田、北條、遠山氏邸及持筒邸屋敷を併合して麻布廣尾町、新笄町と呼んでゐたが明治十二年更に之を併せて廣尾町とし二十四年三月元下澁谷村字笄開谷（カヅガイダニ）の内笄川以東澁谷廣尾町の一部を合した。笄川は本町の西境を流れて市郡の境を形成してゐる。

町内には東京遞信局講習所、私立順心女學校、大日本婦人共愛會、婦人共立育兒會、救世軍東京婦人ホーム、無格社廣尾稻荷神社、佛蘭西大使館等があり、内務大臣安達謙藏氏、前大藏大臣三土忠藏氏、衆議院議員小泉策太郎氏等の大政治家を初め磯野長藏（キリン・ビール社長）、伊吹震（日鐵重役）、松平賴和子、萬里小路元秀男、近藤滋彌男等著名の人物が多い。

廣尾神社の神木公孫樹は周圍一丈四尺、高さ三丈、樹齢三百年位で十七番地の木下櫻と共に本町の老木である。木下櫻については江戸名所花曆に『麻布廣尾に在り、幹の太さ二抱半、南北へ二十一間一尺餘、東西十九間餘、たゞ小山に雪をあびたるが如し、花の頃は見物をゆるされしが近き頃止められたり。此櫻は現今樹形を損じ花も又少し。』云々と誌されてある。

田島町

新堀川の沿岸新廣尾町の南に方り本笄内の極南に位し途中切られて飛地になつてゐる。一番地より六四番地までである。

此邊りは麻布村の田圃であつた。元祿、享保の間に漸次幕府普請役小池某等八十餘人の町屋敷となつて田島町と呼び又三田穩塚代地及西久保天徳寺領代地を合した。其西部を上（カミ）町、東部を下町又は笹屋敷と言ふ。

富士見町

南は大通りを隔てゝ新廣尾町三丁目と相對し、東は本村町、北は本村町盛岡町、西は廣尾町、市外澁谷町元廣尾に堺してゐる。一番地より五十四番地までである。

昔、白金御殿（富士見御殿）跡、新庄藩邸跡及士地であつた。俗に富士見と稱する所があるので富士見町と言ふ。明治十二年十一月麻布本村の一部を本町に併合した。本村町との間に富士見坂がある

り、元の徳川義親侯邸(近く佛國大使館となる筈)の塀に添つて天現寺の方へ下る細い坂を青木坂と呼び昔坂上に青木美濃の下屋敷があつた。町内高地には内閣統計局、英國大使館參事官々舍其他仙石貢(前滿鐵總裁)、岩垂邦彦(日電社長)、山之内一次、松平慶民子等諸氏の大邸宅が多く、低地には工業比較的に發達して共立電機株式會社、石渡電機株式會社等各種の工場が散在してゐる。尚臨濟宗天現寺、臨濟宗光林寺、眞宗存明寺の寺院あり、富士見町派出所は本町南西部十字路交叉點にある。

盛岡町

東南は廣尾町、正南は富士見町、東北は本村町、正北は三軒家町に隣接して地形稍三角形を呈してゐる。一番地より八番地までである。

元南部氏の別邸であつて明和五年始めて町名が附せられ、南部氏は舊盛岡藩主であつたので盛岡町となつた。現今は全町凡て御料地及高松宮御用地として存し池を湛え森林があつて幽邃な一角を形成してゐる。廣尾町との境を盛岡町交番の所から廣尾橋へ下る坂が木下坂である。木下備中守の邸が坂の中途西側に在つた。此坂の下から東へ統計局の前へ登る坂を南部坂と言ふ。本町内に麻布消防署、盛岡町巡査派出所がある。

本村町

南は電車通りを隔てゝ新廣尾町、東は新堀町、竹谷町、北は山元町、西町、宮村町、三軒家町と境し、西は盛岡町富士見町に接してゐる。町域廣く丘陵起伏してゐる。番地は一番地より二二六番地までである。

麻布村の一部であつたが、里正村史の住居してゐた所なので本村と呼び遂に町名となつた。明治二年東福寺門前を合し五年又士屋氏別邸を併せた。町の中央を上の町、東北を谷戸町、西を西之臺南を絶江と云ふ。町内字新町より四之橋へ下る坂を藥園坂と稱し、正徳の頃まで舊幕府のお藥園があつた。今之を訛つてお役人坂とも言ひ或は坂下に土屋相模守の下屋敷があつた爲相模殿坂とも呼ばれる。仙臺坂上から南の横町を入りお藥園坂の上に出やうとする途中を西へ下り直ぐ又上る坂に奴坂がある。昔この邊に奴の住むものが多かつたからである。絶江坂はお藥園坂の上から東南の横町を延明院の前から南座の脇に下る坂を指して云ひ、弘法坂は本村町六十二番地先に在る坂を呼ぶ。

當町には本村尋常小學校、新堀尋常小學校、私立麻布中學校等の學校、鄕社氷川神社、曹溪寺、淨專寺、天眞寺、西福寺、妙行寺、春桃院、遍照寺、稱念寺、明稱寺、圓澤寺、延命院等の寺社及本町の南部低地には伊東胡蝶園、友野發動機製造工場、日活封切場南座、私設簡易宿泊所等があり本町北部より東に下る仙臺坂上に仙臺坂上派出所がある。

司法大臣渡邊千冬子爵、朝鮮銀行總裁加藤絞十郎、三井物産重役三井辨藏、貴族員議員市來乙彦、伯爵鳥津正範等の政治界經濟界の最高峰級の人物が多く居住してゐる。

西　町

東は一本松町及山元町、西南は宮村町の一部及本村町に續いてゐる。一番地より二十六番地までである。

善福寺門前西町と稱してゐたが明治二年西町に改め五年成羽(なりわ)藩山崎氏邸地を併せた。本町には殆んど商家なく官吏、會社員等多く松方正熊、鷹司信熙、板谷順助(代議士)諸氏邸宅がある。本町二番地には加奈陀大使館がある。松方氏邸内の「化け椿」は麻布七不思議の一つで、白、赤、絞りと三色の交咲きで全く珍らしい。

一本松町

東は坂下町、西北は宮村町、南は西町及山元町に隣接して一帯の高臺を成してゐる。番地は一番地より四十一番地までである。

冠松或は一本松と稱する老松のあつたのが町名の起源である。寛文の頃麻布村から分れて一町となり明治二年臺雲寺門前を併せた。町内には賢宗寺、長傳寺、德正寺、大法寺、本善寺等寺院多く安場保健男、三井銀行重役三井高光、日本陶器株式會社々長大倉和親等の邸宅がある。

一本松から十番の雜色通へ出る坂を一本松坂或は一本坂と云ひ、此坂の中途から十番大通の末廣神社の角へ出る坂を七面坂或は鴉坂、一本松坂の途中大法寺前の邊りを大黒坂或は相逢坂と呼ぶ。

坂下町

東は網代町に連り北は宮下町に接し西は一本松町に堺し南は山元町に續く。一番地より四十一番地までである。

此附近を雜色と呼んで元麻布村の内に在つたが正德三年町地に屬した。大黒坂の下にあるので坂下町と言ふのである。村社末廣神社がある。本町は殆んど商店街で殊に十番通へ通ずる雜色通りは繁華な商店軒を連ね附近花明柳暗の巷から流れて來る絃歌のさゞめきと共に本町特異の雰圍氣を醸成してゐる。坂下町派出所は此雜色通りにある。

山　元　町

北は網代町に接し小山橋より二ノ橋に至る電車道路の西側で、南は東町、竹谷町、北は網代、坂下、一本松の三町に隣りして西は本村町西町に續く丘陵地である。一番地より五十九番地までである。

昔此町は善福寺境内の一部であつた、慶安年間に門前町屋となり三町に區分して中央を元町(詳しく言へば善福寺門前元町)、東を東町、西を西町と稱したが明治二年元町に舊飯野(いひの)藩保科(ほしな)氏邸を併せて本町とした。本町西部には寺院多く善福寺、西福寺、善通寺、專光寺、光善寺、善行寺、金藏寺、眞福寺、善正寺等があつて本町東部の紅燈綠酒のお白粉地帶と皮肉な對照を示してゐる。解脫と煩惱とが同居してゐる町である。

東　　町

山元町と新堀町との中間にある。東北の一角は二の橋に臨み、西は竹谷町に接す。一番地より四十八番地までである。

昔、善福寺門前東町と稱したが明治二年今の如く呼ぶ様になり五年新屋敷と云ふ土地を合併した。此邊りを俗に鷹石と稱する。本町には福泉寺、浮光寺、稱名寺の諸寺、東町尋常小學校、池田政保子、川上直之助氏邸等がある。

竹　谷　町

平行四邊形の如き形を爲して西北丘陵を負ひ東方東町に連つて、其南邊及西邊は本村町と接續する。番地は一番地より十四番地までである。

麻布村の一部で明暦年間舊仙臺藩伊達氏の別邸となり明治二年附近の土地を合し西隣本村町に竹谷町の舊稱があつたのでそれを町名とした。當町より本村町に登る坂路を仙臺坂と呼び下れば雜色小山の方へ出る。仙臺藩主松平陸奥守の屋敷に添ふてゐたから仙臺坂と云ふ。高臺には閑雅にして眺望絶佳の戊辰倶樂部がある。もと大岡育造氏の邸宅であつたが昭和三年四月此倶樂部が設立され會員組織になつてゐて政治家、實業家等名士の會合場である。東南部の低地には株式會社松尾機械製造工場、藤本鑄物工場、上村鐵工場、黒坂電球製作所、中岡蓄音器製造工場、光山バルブ・コツ

クス製造工場等の諸工場、清和寮(當警察寮)があり、嘗ては總理大臣として又元老として威望を集めた松方正義氏の私邸は今尚六番地にあつて昔日の豪勢を偲ぶに十分である。

新　堀　町

南及東は電車通りを隔てゝ古川(新堀川)の沿岸新廣尾町に對し北は東町、西は本村町に接してゐる。十一番地先市電線路の岐點附近は標高海抜五米である。番地は一番地から十三番地までである。

昔麻布村の内に在つた。寛文年間舊高知支藩中山内匠氏、舊高取藩植村氏、舊飯田藩堀氏の別邸が設けられ、明治五年之を合併し新堀川に沿つてゐるので新堀町と名付られた。

町内は人家稠密で、小家屋多く雜然としてゐる。無產階級の住民が多い。東京遞信局工務課倉庫、奈良電機製造工場、合資會社三九商會鑄物工場其他の小工場も散在してゐる。麻布獸醫學校、私立東海商業學校、東京工業專修學校、日本赤十字社麻布診療所、日高莊之丞男(海軍大將)邸等凡て本町内に在る。

網　代　町

坂下町の東に在つて南は山元町と接してゐる。一番地から三十五番地までである。

昔時此邊りは麻布村の沼池で惡所であつたが享保年間新網町二丁目の内の代地となり元文三年舊稱新網町代地を略稱して網代町に改め明治二年今井寺町代地及飛地を合し更に五年華族松平氏邸を併

せた。

本町は北部に十番通りの近代的商業街を控へ東は電車通に面し、西部に小商店街網代通りを縦貫させ、中央は麻布三業組合の藝妓屋、待合、料理屋が其大部分を領し所謂十番藝者のエロテイシズムを發散させて居る。商店と花柳の街である。網代町通りは幅員漸く九尺で雜沓を極めるので昭和五年七月市長及區長へ同道路擴張を陳情した。

新曲 二の橋小唄　平山蘆江作詞　杵屋五三造作曲　(二、三、四、五略)

一、麻布十番來て見れあ都
　花の山元情の網代
　色も香もある江戸模様
　　サテ江戸模様

六、待てば來る來るいつもの笑顏
　一の橋から二の橋こえて
　三つ見なれたぬしの顏
　　サテぬしの顏

宮下町

丘陵の間に在る低地で東は新網町二丁目に、西は南日ヶ窪町の一角に、南は坂下町の一部及宮村町に隣接してゐる。番地は一番地から四十八番地迄ある。

元と麻布村の原野で寶永六年初めて幕府坊主陸尺(ロクシャク)の町屋敷となり、正徳年間より人家增加して市街となつて來た。近くに氷川神社があるので宮下町と呼ぶに至つた。十番通の續きの商業區域を形成してゐる。本町には麻布郵便局がある。

宮村町

東は南日ヶ窪町、宮下町、西は櫻田町の一部及三軒家町、南は一本松町及本村町、北は北日ヶ窪町及櫻田町の一部と其境を接してゐる。一番地より八十一番地までが本署の管轄區域である。

土地高燥にして閑雅、昔氷川神社があつたので宮村と呼稱し正徳三年市地に屬してから之を以つて町名と爲した。明治二年貞久(テイキウ)屋敷、宗與(ソウヨ)屋敷、永坂町飛地を併合し、五年内田氏邸及寺地を合した。俗に當町を藪下とも言ひ、又西方三軒家町の高臺を大隅山或は新道と稱する。鳥居坂を下り十番通から宮村町二番地と五番地の間を一本松へ上る坂を暗闇坂と言つて、今も尚さうであるが昔は一層此邊り樹木鬱蒼と繁茂して實なほ暗い所であつた。一本松から西へ下るのを狸(タヌキ)坂と呼んで此邊りも且つては狸が横行濶歩してゐたのだらう。此狸坂の下を三軒家町へ上る路が大隅坂で坂上に渡

邊大隅守の屋敷があつた。

本町には本署管内に安田銀行麻布支店、日活映畫封切場麻布日活館、本光寺、中川久住伯邸六本木署管内に南山尋常小學校、麻布高等小學校、光隆寺等がある。

新廣尾町

本町は一の橋より天現寺橋までの古川に沿つてゐる細長い帶の様な町で昔は人家の無い靜寂な河邊で古川端と稱した。明治六、七年頃迄は兩岸に桃樹多く、古川の清流が春の陽炎に溫む頃先づ麻布の春を告げるのは此桃の花であつた。初夏の螢狩と共に都人が杖を引いて訪れたものだ。

明治三、四十年頃は未だ人家鮮落とした新開地であつたが四十二年市電の開通と共に急激な發達し現今見る様な市街を形成するに至つた。明治四十四年四月廣尾町から別れて新廣尾町となつた。

本署管内中最も工場多く鑄物工場、鍛金工場、鎔接工場、製材、石材、各種機械等の製作工場多く、町態雜然として比較的下層階級の住居する者が多い。

一丁目

一ノ橋より三ノ橋までの兩岸が一丁目で一一二番地より一三四番地までであり、適要工場は十一ある。二ノ橋は南岸に間部若狹守の邸宅があつたので間部橋とも言ふ。此一ノ橋々畔で維新の志士清川八郎が佐幕派に擁されて斬殺されたのは文久三年四月三日であるが、此事件の目擊者堤和保翁

(八二)は未だ管内に生存してゐる。

二丁目

三之橋より四之橋迄の兩岸で一一一番地及一三四番地から一四六番地までである。三の橋は肥後橋とも言ふ。南岸に松平肥後守の邸宅があつたからである。

本町には木賃宿が十軒あつて常に三百人位の自由勞働者が宿泊してゐる。今試みに昭和六年度調査に因る本町内と本署管内全體の自由勞働者宿泊人員數を比較して見れば、

自由勞働者調査表

月別	新廣尾二丁目	同三丁目	其他	管内合計
一月	八一	八	二七	一一六
二月	七六	—	—	一二一
三月	五九	—	四三	一〇二
四月	四一	—	五七	九八
五月	六一	一四	四〇	一一五
六月	四七	二	三五	九四
七月	三七	一五	五七	一〇九
八月	三二	一三	六七	一一二

〔註〕

	新廣尾町二丁目		其他		本署管内合計	
九月	二八五	人	一五	人	三〇〇	人
十月	二五四		二五〇		五〇四	
十一月	二九三		二一八		五一一	

（昭和四年調査）

此新廣尾町には勞働者宿泊所の建設を東京市社會局で計畫中である。

適要工場一〇、日本畫夜銀行麻布支店がある。

三丁目

四の橋から狸橋までの南岸及天現寺橋までの北岸が新廣尾町三丁目で番地は八〇番地より九六番地及一四七番地一六二番地である。

四の橋附近を新堀端と呼び、狸橋と四ノ橋との間に龜尾橋、青山橋があり適要工場七ある。

第三章　神社佛閣

第一節　神社

氷川神社

本村町一

麻布の總鎭守で素盞嗚尊、日本武尊を祀る。昔は今の宮村町切通坂（黒暗坂）附近にあつて、社域非常に廣く永坂鳥居坂に其華表があつたと言ふ。其創建年記には二說あつて一は天慶二年源經基が東征の時と言ふ說と、他は文明中太田道灌が足立郡大宮驛の氷川社を勸請したとの說である。萬治二年現在の地に移つた。（又寛文二年譯白和尙が此處に隱栖した時本社を現地に移したとも傳へられる。）江戸氷川七社の一で明治五年鄕社に列した。九月十七日（昔は八月十七日）を祭日とする。境內に大銀杏樹がある。

末廣神社

坂下町三九

祭神は倉稻魂（ウカノミタマ）（稻荷大神）日本武尊（ヤマトタケノミコト）（大鳥大神）田心姫命（タゴリ）、湍津姫命（タギツ）、市杵島姫命（イチキ）（以上三神嚴島大神）で慶長中に創建せられ明治六年七月村社に列した。祭日は九月十七、十八日である。昔境內の柳の枝條繁茂して扇狀を成してゐたので末廣稻荷と呼んでゐたが明治二十年に末廣神社と改稱

し昭和五年四月社殿、神業殿等新築し其面目を一新した。

熊野神社　飯倉町五ノ四八

元祿十六年火災に罹つて舊記を燒失したので、其創建年月は不詳であるが社傳には養老年間芝の海濱に在つたのを今の所に移したとあり、府內備考には應永の頃慶祐阿闍梨が勸請したと在る。伊弉諾命・伊弉冉命・素盞嗚命を祀る。稻荷神社があつて太田道灌の守護神を祀り太田稻荷と稱する。社に太田道灌の寄附と傳へらる太鼓及埴輪百萬塔（靑森縣津輕郡十腰村發見）五個、石斧（武藏茌原郡上沼部村發見）一百個を藏してゐる。明治五年村社に列し祭日は六月一日より三日間である。

竹長稻荷神社　永坂町四三

和銅五年の創建で舊くは大社であつたと言ふ。元竹千代稻荷と稱してゐたが幕府世子の通稱竹千代を避けて竹長と改めた。又稗田神社とも呼び、社寶に翁の面、陰陽の鍵等あつて、祭神は倉稻魂命である。

赤羽神社　飯倉町五ノ四八

昔江戶本丸の邊に在つたのを太田道灌築城の際芝丸山に遷し其後同所が增上寺の境內となつたので遂に現今の場所に移した。祭神は宇迦御魂命で祭禮は四月二日である。

廣尾神社　廣尾町三九

元富士見稻荷と稱し麻布御殿の鎭守として祀られたものだと傳へらる。拜殿天井に八方睥睨の畫龍がある。

此の外に高尾神社、五社稻荷神社、秋葉神社等がある。

第二節　佛閣

善福寺　山元町三〇

善福寺は京都本願寺の末派で麻布山と號する。往昔僧空海創建の眞言寺で規模を高野山に取つたので新高野山とも言はれて都下有數の古刹であり名刹である。中興開基の僧了海の時眞宗に改めた。文政寺社書上に

起立之年代記、雖二燒失相知不一レ申候一、弘法大師開闢にして、眞言宗の靈地也。弘法大師當山（善福寺）起立之後、紀州高野山に赴き給ふ。夫より弟子相承仕、中興開基了海上人迄眞言宗にて罷在候。尤空海の海の字、通號に可レ致旨、被二申置一、今に海の字法名の通字に仕候。

寺傳に、了海は鳥羽院の苗裔（ベウエイ）西院左大臣信實の子、信實東海に流されて、茌原郡大井村に住して此處に了海を擧げたと載せてある。

德治元年十一月寂した。忌日には三日三夜法會を營み、門前氏子より密柑團子筵にさして筵團子

と稱して供物をなした。後此密柑團子を參詣者に蒔くを例とした。山號は德川家光來臨の時境內山の形が龜に似てゐるので『龜子山と稱すべし』と言つてからは一時其稱を用ひてゐたが今は舊稱の通り麻布山と呼んでゐる。

昔境內にあつた栖仙亭は將軍の休憩所で林泉の風趣非常に好く嘗つては藤原定福（テイフク）が六景の詩を作り又服部南郭（ナンクワク）が栖仙亭記を書いたものだ。句碑に

此山の月に來て鳴けほと〳〵ぎす

がある。

本寺は、幕末アメリカから黑船の渡來に依つて、泰平三百年の夢から醒め政權奉還の序幕となつたあの大芝居、其登場人物として活躍した大立物米國總領事タウンセンド・ハリス及彼の從者が此處に寓居して安政六年から明治八年に至る間米國公使館に充てられた事は餘りにも著名な事蹟である。當時外國人宿寺五箇所の一であつた。あの唐人お吉が廿一歲の時、江戶に出て再びハリスと麻布善福寺に住み、日夜酒に浸つて遂に酒亂となつてハリスの許を淋しく去つて行つた幕末秘話を知る人は少い樣である。

尙善福寺所藏文書に

禁制

武藏國白金
之鄕阿佐布　善福寺

一、軍勢甲乙人等、濫妨狼藉事。

一、放火事。

一、對寺僧門前之輩非分之儀申懸事。

右條々堅令停止訖。若於違犯之族者、忽可被處嚴科者也。

天正十八年卯月　日

御朱印　豐臣秀吉

これは豐臣秀吉が相模國小田原を討つた時江戶各所に出した禁榜の一で謂はば當時の警察行政の一でもあつた。

善福寺は、先づ總門を入れば右側に金藏寺、左側に眞宗光善寺、善光寺、普通寺があり之に添つて南下すれば右に西福寺左に專光寺がある。之等の諸寺は善正寺、眞福寺、淨泉寺と共に舊子院である。此處から裡門に出る。中門は菊桐の模樣が浮彫りになつて、石段數階を上りて入れば右に太子堂鼓樓がある。正面は本堂で、本堂の左に杖銀杏鐘樓があり右に玄關庫裡等がある。本堂の南手小高き所に開基堂がある。寺院は宏壯雄大な舊觀を示して堂內の佛壇及左右壁間の裝飾美、彫刻の巧緻香烟に燻んだ金色は、さすがに往時の盛況を偲ばせる。

將軍梅は德川家光が接木したものだと言はれる。

杖銀杏公は俗に逆銀杏とも稱して親鸞の遺跡である。親鸞上人が了海上人に附法して愈々當寺を去る時に其携へてゐた杖を地に挿し込み、指して『念佛の弘法は凡夫の往生も亦斯の如きか』と言つた所が此杖忽然として根芽を逆に生じ遂に枝葉繁茂したものだと傳へられる。周圍三丈高さ六丈五尺樹齢七百五十年と數へられ都下最大の老樹で天然記念物に指定されてゐる。鬱蒼たる枝葉はさながら一の杜森の如く空を掩つて奇怪の觀すら抱かせる。

藏王權現堂　は善福寺中門の內にある。當時開山の堂で、了海上人の在世の時藏王權現が老翁になつて現れ教を示したので上人自ら其像を刻んで安置したものと傳へらる。

鹿島清水　は楊柳の水或は弘法の水とも稱し本山總門と中門との間にある。此井泉は昔時弘法大師常住國鹿島明神に乞ふて得た所の阿伽井で鹿島明神社內に在つた七つの井が此井泉の湧出と同時に其等の中の一井が乾燥したと言ふ。水質清冷で今尙枯柳の下に沸々として湧いてゐる。

寺寶　中重なるものは次の如くである。

六字名號一幅——刷毛書の名號と云ふ。承和元年三月十五日空海書之とある。

五大力明王畫像——弘法眞筆

如意輪觀世音木像一體——弘法作、眞言宗であつた時の本尊

毘沙門天王木像一體——弘法作、　釋迦如來木像一體——弘法作、二大師弘通念佛畫像——西山義惠畫、　三尊名號——津の戸三郎爲益筆。

腹縞（ハリゴモ）りの面

了海上人が藏王權現から授かつたものであると云はれる。十一月五日木像灌頂の時拜覽させる。

金泥（コンデイ）八字名號——見眞大師が了海上人に授けたもの。白鷺の名號見眞大師眞筆の歌

　聲なくば何をそれとも知らればし
　　雪降りかゝる蘆原の鷺

見眞大師雛形の尊影——蓮如作。見眞大師火中出現の靈像——蓮如作。聖德太子木像。石山陣中の旗。千蝶（センチヨウ）の硯箱——東山義政が當山祐海に贈つたもの。

冷泉院御製眞筆歌

　忍ぶるに心のひまはなけれども
　　猶もるものは涙なりけり

後花園天皇御製

　山鳥の尾上へだてゝ八重がすみ
　　嶺も松原の深き色かな

芝青松寺の末派で金龍山と號し、慶長十九年の創建である。開基は堅田就政（カタダナリマサ）、開山は僧一峯である。文政寺社書上に次の如くある。

本寺芝貝塚萬年山青松寺末飯倉

禪曹洞宗　金龍山　瑠璃光寺

一、境内御年貢地　坪數千五百七十坪
　右御年貢地に相違無二御座一候。
一、開闢地起立之儀は慶長十九甲寅年御座候。
一、開山一峰禪曹和尚遷化、元和九癸亥十一月八日――下略。

伊集院土佐守（寛永六年七月歿）、佐藤直方（通稱五郎右衛門、山崎闇齋の高足）の墓がある。

光　謙　寺　飯倉町一ノ四

眞言宗川崎平間寺の末派で除厄大師の旅所（タビショ）である。七日、二十一日の緣日には賽者が可なりある。

一　乘　寺　飯倉町三ノ一九

日蓮宗安房誕生寺末派で廣榮山と號する。創建年月は不詳である。開山日達は萬治四年に寂した。

眞　淨　寺　飯倉町三ノ二〇

日蓮宗下總平賀本土寺の末派で妙光山と號する。開山を日養と言ひ創建年月不明である。日養は明曆元年五月寂した。寺寶中重なるものは左の通りである。

十界常住の大曼荼羅。日蓮像（日法作）。鬼子母神像（日常作）。十界の本尊（日蓮作）。山水畫一幅（明張守清筆）。日蓮入滅の大畫像一幅。

心　光　院　飯倉町五ノ五七

增上寺末派で其別院である。天正中增上寺内に創建し寶曆年間今の地に移つた。開基を聖聰（ショウソウ）とし開山を光阿とする。布引觀音。人丸詞等があるが此人丸詞は寛永年間此處に移したものである。遷座の日冷泉大納言（レイゼンダイナゴン）爲村の納めた歌に

よろづ代とみち照しませみつかきの本の光を移す宮居に

善　長　寺　飯倉町五ノ二一

淨土宗芝增上寺の末派で飯倉山辨天院（ハンソウ）と號する。寛永十三年寶松院開山信譽が開いて、其當時西久保赤羽根町裏通にあつたが慶安元年現在の地に移つた。寺内に阿珊地藏水野勝成女の石碑がある。水野日向守の室お珊の方は性來蝕齒を惱んだが地藏尊に祈願して平癒し、其後寛永十一年死去し福山の定福寺に葬つた。後善長寺五世の住僧が其靈驗あらたかなのを知つて地藏尊を建て其下に骨を埋めて「お珊地藏尊」と崇め江戸時代には相當信仰されたものである。

大　長　寺　永坂町七

日蓮宗越後國三島郡妙法寺末派で本妙山と號し開山は僧日久で寛文七年創建した。七面堂があつて日朝の木像を安置してある。

光照寺

西本願寺の末派で雲岳山と呼び寛永四年の創建である。文政寺社書上に

築地本願寺末麻布永坂

浄土眞宗　雲岳山　光照寺

永坂町四

一、境內坪數古跡御年貢地三百二十六坪。

內小間六間半門前。但日本橋より一里八丁。

一、開闢起立大和國吉野郡比蘇邑に現光寺と號し、聖徳太子之尊像を本尊と致罷在、元和年中靈夢を感じ浄土眞宗に歸し、一宇之坊舍に仕、本願寺准如上人太子之靈像奇瑞多き事を感じ、現光寺と被ㇾ名附ㇾ候。起立は寛永四丁卯年に御座候。當文政十一年子年迄二百二年に相成申候。

とあつて往古大和吉野郡の現光寺が火災に罹て烏有に歸したが寺僧願正聖徳太子の像を携へ江戸に來た事が判る。元和中本宗に歸し後一寺を建てたのが其創始である。

徳正寺

一本松町三五

西本願寺の末派で松本山と號して開山は紀伊の人道教である。寛永元年關東に來て一本松のほとりに庵室を結び十五年に始めて徳正寺と呼んだ。其後寛保三年に至つて今の地に移つたのである。

賢巣寺

一本松町三六

曹洞宗下野宇都宮成高寺の末派である。興國山と號して始め寛永十二年佐賀藩鍋島忠直の爲めに創建したが其法名を以つて山號及寺號とした。開山は僧魚泉である。鍋島家歷代の菩提所で閑叟公直正の墓がある。明治四年に菟じ正二を贈られた。

大法寺

一本松町一五

日蓮宗安房小湊誕生寺末で榮久山と號し慶長二年創建僧日利が開山した。大黒殿があつて、寺前の坂を大黒坂と稱する。

長傳寺

一本松町二九

浄土宗京都智恩院の末派で山號は一松山と言ひ、寛永五年の創建で、僧林哲を開基とする。本寺所藏の朽木觀音像は昔一本松の枯死した時朽蝕して自然に形成されたものであると言はれてゐる。其傍の古碑には、三尊の梵字を刻し、右側に延文三年三月日と在る。

本誓寺

一本松町九

日蓮宗下總本土寺末派で松頭山と號する。起立は寛永二年、開山は日東と傳へられてゐる。本尊は七面天女で俗に麻布十番の七面天と呼ばれる。

本光寺　宮村町二一

日蓮宗越後本成寺末派で山號は明見山（ノケン）、寛永元年の開山で、法仙院日要大德師之を今井村に創建したが、萬治元年西久保に移り、更に延寶六年現在の地に移つた。境内に腕の喜三郎の墓と稱するものがある。

春桃院　本村町一三

禪宗臨濟宗京都妙心寺の末派で仙境山と云ふ。元和元年今の麻布谷町に禪棲を營んで自適庵と號してゐたが萬治元年此地に移つた。開山の僧を雲外祖連と言ふ。

稱念寺　本村町一三〇

淨土宗京都智恩院末で西光山と呼び創建年月日は不詳である。開山を僧了（レウ）故とし西方札所の二十九番である。

通照寺　木村町九三

淨土宗本區六本木町教善寺の末寺で光明山護念寺と號する。寛永元年創建、開山は僧泰翁である。本寺安置の觀世音は西方三十三番札所の三十番に當る。

延命院　本村町一七七

眞言宗山城國醍醐三寶院末派で金剛山寶幢（ホウトウ）寺と號する。僧秀圓の創建で其年月日は詳かでない。

府下八十八ヶ所札所の第五番に當り、境内には寶祿（ハウロク）稻荷社がある。

菖溪寺　本村町二〇六

臨濟宗妙心寺の末派で日東山と號し、元和九年創建せられ後此地に移轉した。文政寺社書上に一、武州豐島郡今井村に有之、眞田傳四郎、京極伊織、淺野土佐守屋敷屋鋪之場所元和九癸亥年起立。とあり、僧絕江の開山である。寺内に藤森天山、寺阪吉衞門の墓がある。前者は儒士にして勤王家、弘安とも稱し名は大雅、字梓然文久二年六十四歳で歿し、維新後從四位を贈られた。後者は赤穗義士の一人であるが復讐顚末報告の爲赤穗に歸つたので切腹を免れ一生を同志の回向に過したので有名である。延享四年八十三歳で歿した。寺寶中重なるものは、大慧（ケイ）筆一幅、大燈筆一幅、無準（ムジュン）筆一幅、絕江筆一幅、雪舟筆佛畫一幅、德川家綱筆達磨一幅、同鷹一幅筆である。

天眞寺　本村町五一

臨濟宗紫野大德寺末派で佛陀山と號する。寛永元年に創建し、僧仙溪の開山する所である。往昔其堂宇は七寶莊嚴の大伽藍であつたと言ふ。松崎堯臣（ゲウシン）の墓がある。字は子允觀瀾、寶曆三年に歿した。

龍泉寺　東町六

眞宗東本願寺の末派に屬して、永祿元年鎌倉より此地に移つて來た。開山の僧は海信である。寺

寶の重なるものは隨陳仁積筆阿彌陀如來石摺像一幅、同阿彌陀經石摺一幅、鎭海寺立石觀世音像一幅、法如筆雪中梅畫、文晁筆山水畫一幅、抱一筆柳小鳥畫一幅等がある。

天現寺　富士見町四九

臨濟宗京都紫野大德寺の末寺で多聞山と號する。創建年月は詳かではないが開山良堂は、享保十八年に寂した。享保十二年大學頭林信充が寺內の十境を撰んで靈梅詞、育王塔、聽水橋、敲月樓、雨華壇、冷燈龕、雷電森、澁谷川、白銀臺、青蓮峯と言ふたが蓋し當時の天現寺は絕好なる幽邃境に在つたに違ひない。重なる寺寶は左の如きものである。

綸旨三通、毘沙門天王木像一體、釋迦如來銅像（天笠佛とも言ふ）一體、唐銅十一面觀世音像（弘法作）一體、天滿宮自筆（紺紙金泥經文三行）一枚、九條法衣（赤地金襴菱紋散德川吉宗公寄附）一領、虎の卷二軸、鎭西八郎爲朝矢の根（長一尺三寸三分）一本、光孝天皇御陵石燈籠（金森家寄附）一基、育王塔（九重）一基

光林寺　富士見町三七

臨濟宗妙心寺末派で其山號を慈眼山と言ふ。延寶六年十月麻布市兵衞町に創建せられた。京橋高和夫人の開基である。明治維新の外交史に燦として輝くハリスの脇師として活躍し『唐人お吉』にお吉の妹分お福と其紅毛情話に一世の耳目を聳動せしめたヘンリック・ジェー・ヒュースケンの墓は本堂の裏手小高い所にあり其墓面には十字架と共に刻まれてある文字をたどると——Sacred to the Memory of Henryc, J. Heusken. Interpreter to the American Legation in Japan. Born at Amsterdam January 20, 1832. Died at Jedo January 16, 1861——とある。境內廣く中々立派な寺である。

阿彌陀寺　廣尾町一

此寺には東都最古の名鐘がある。今より凡六百年前、後醍醐天皇の元德二年に鑄造せられたもので、初は鎌倉法泉寺の物であつた。國寶にいづれは指定さるゝべき名鐘であると古鐘研究學者は稱してゐる。

尙妙行寺は本村町十番地に在り、萬德山と號して眞宗本派である。眞宗大谷派の明稱寺は同町一四七に、禪宗大圓寺末龍廣山圓澤寺は同町一五八に、眞言宗淨專寺は同町一九九に、眞宗大谷派の西福寺は同町一五六に在つて境內には鐘樓がある。

第四章　史蹟

外人旅館址

飯倉五丁目三十九番地附近である。舊幕時代獨逸公使館を置いた所で孛漏舎人旅館と呼んだ。我國に於ける最初の外國公使館であつた。又此處で幕吏が外國人と應接したので赤羽應接所とも言ひ條約の締結も此應接所に於て爲された意義深い場所である。且つて我國全權委員の一人堀識部は米國通譯官ヒュースケンと談論の最中國家的侮蔑を蒙り、其場は怒を忍んで、後、時の老中安藤對島守に意見を吐露したが遂に容れられず義憤の餘り割腹して自刃した。其臣之を見てヒュースケン應接所よりの歸途を赤羽根河岸に擁して彼を殺害した。斯くして彼は二十九歳にしていはれなき排外思想の双に倒れた。

赤羽根廣小路

飯倉五丁目赤羽根橋の北側で街路が廣いので廣小路と名付けられた。此地は芝山内、飯倉、三田、麻布等に通ずる四通八達の土地で昔は車馬輻輳し非常に殷賑を極めた。橋北には毎朝肴市が立ち、夏は納涼地として見世物、飲食物の露店が出たものである。柏如亭の詩に、

追ゾ涼士女晩喧嘩。　笑語歌聲在二水涯一。

赤羽橋頭好風月。　夜深纔屬散人家。

とある。

我善坊谷

龕前坊谷（龕は佛像を安置する箱或は柩の意）の轉訛で、徳川秀忠の夫人淺井氏の柩を置いた所であることは第一章市街の部に於て前述した通りである。

土器町

飯倉町三丁目を俗にかはらけ町と稱し、其坂路を土器坂と言ふが其由來は元此附近に土器師が多かつた爲である。

愛宕より瓦け町へほとゝぎす　　名物鹿子

勝手ケ原

飯倉町一丁目から五丁目邊りを謂ふ。昔此附近は曠漠とした原野で太田道灌が出陣の時、此地へ勢揃ひをして人馬を檢したと傳へられてゐる。

的場跡

飯倉五丁目にあつたが維新後取拂れて市街地となつた。長さ三十間横三十間の弓術練習場で昔は相當盛んなものであつたらしいが今は跡方もない。

先生小路

赤羽橋の西北森元町附近は、昔服部南郭等の學者が多く住んでゐたので斯く呼ばれた。

徳川綱重居館址

狸穴町にあつて甲府屋敷と呼ばれる。府内備考に

承應二年此處に邸地を給す。當時邸地今の三田村及飯倉片町、麻布狸穴に渉る。寶永以後西丸(ニシノマル)御用屋敷と稱し、後士地となる。

と在る。

文七元結起原地

麻布坂下の土地は、江戸時代盛んに行はれた文七元結を初めて製作した土地であると言はれる。今は僅か一軒宮下町藪下に水引を造つてゐる家が殘つてゐるが以前は澤山あつた様だ。

麻布十番の馬場趾

新網町一丁目の邊りである。昔此附近に當時所謂十番の馬場があつた。此馬場は承應年間以來の調馬所であり且又仙臺駒の市場であつた。十一月より十二月までの内三回の市が立つたと言ふ事である。此馬場の附近に仕立屋があつて、乘馬用の襠高袴(マチダカバカマ)を製出した所其形よく乘心持適して殊に珍重せられ、所謂十番馬乘袴の名は之に起原するのである。

增上寺隱居跡

宮村町の黒暗坂を登りつめた右手の丘を增上寺隱居跡と言ひ今は其俤はないが、寛文二年九月增上寺の僧本譽は此勝景の地を選んで僧房を建て、其後歴世現譽に至るまで綠山(エン)辭職後の閑居地となつてゐた。境内に八境十景の勝があつて其中に悟達した老僧が三昧の境地に浸つてゐたのであらう。

八境

開扇朦月。　窓前蟲聲。　斜徑散歩。　垂枝綻花。
山井清澄。　氷川鎭詞。　秋園芳草。　祖塔蒼苔。

十景

長傳幽鐘。　麻店炊煙。　總山晩雲。　赤橋行客。
杜間流螢。　芝峯唐塔。　海路遠帆。　孤松霄雨。
枯林宿鴉。　春天紅霞。

此增上寺隱居跡の直ぐ傍に、今の宮村町十番地の邊りにお牢屋と呼ばれた細長い建物が明治廿年頃まで殘つてゐたが之は破戒坊主や悪事をした山内の坊さん達を押込めて置く爲に造られたものだと謂はれる。

一本松町長傳寺門前にある。四方石を疊んで少し高くして圍つてあるが昔の錦繪にある老樹は明和の火災に枯れて、其後幾回か植繼いで現在のは明治二十一年に植代られたものである。昔源（ミナモト）經基が平將門を討伐する爲下向の途中此處に冠を掛けたので冠の松とも呼ばれる。卽ち江戸砂子には『一本松、一名冠之松、大木之松に注連をかけたり。天慶二年（大正十三年より九八五年前）源經基王總州平將門が館に入つて歸路之時龍川（今の廣尾の川なり）を越へて此所で民家に止宿し主の賤粟飯を柏の葉にもりてさゝぐ其翌日裝束を麻のかりきぬにかへて京家之裝束をかけ置かれし故冠の松とぞ』とあり、此松に咳之病人願掛し平癒の上は竹の筒に醴を入れて奉つたが今でも松の根本に醴の入つてゐる罎が並べてある。嫉妬深き女が此松に咒咀の釘を打つた故事から姑の印の松とも呼ばれる。又慶長五年關原の役の時德川家康が岐阜から來た首塚を此處に築いたとも傳へられる。近くは、維新の頃此附近に幕府の晒場があつて生首が晒されてあつた。

首　塚

府內備考に

一本松の下に增上寺屋敷といふ所あり、一本松はもと古墳なりとも云へば、此ほとりにてもあらん。

武德安民記には

慶長五年八月二十八日岐阜より使節參着して、再び尺素を獻じ、首級をさゝぐ。其の員數福島左衞門大夫四百三十、池田三右衞門四百九十、淺野左京大夫三百八——中略——を大桶に入れて到着す。家康卽ち實驗し麻布の原に首塚を築き之を埋め、增上寺源譽玉藏院忠義に命じ敎養せしむ。等とあるが今其首塚の所在場所を適確に知る事は出來ないが兎に角一本松から善福寺の附近である事は大體推測出來る。

蝦　墓　池

本村町渡邊千冬子邸の無邊洞內に在つて麻布七不思議の一つである。元五千石を領したる高家山崎氏の邸趾である。此池は凡そ一千坪、四圍丘陵に取圍まれて、滿々と碧水を湛えてゐる有樣は閑寂其物の如くである。睡蓮に戲れる水鳥が靜づかな波紋を畫き乍ら一幅の此繪面に靜と動との面白い對照を與へてゐる。

此蝦墓ケ池の傳說に就いて渡邊家から次の樣に書いて寄せられたので其儘載錄する。

古來の傳說に依れば山崎家は幕府開かれてより此方未だ曾て祝融の災に罹つた事がないそれは此池に小牛程の大蝦蟇が棲息し居りて火を伏せるからだと言はれて居る。弘化二年正月靑山より出火し高輪海岸まで延燒せし折にも池の大蝦蟇出で來りて水を吹き山崎邸及其向側なる氷川神社のみ火災を免かれた相である。

尙昔より山崎家に於て「上の字樣」と稱ふる火傷の御守を頒布し居りて舊幕時代には水天宮の御守と並び貴ばれたが此の御守の上の字はやはり蝦蟇が昔血を吐いて書いたのが源をなし居るとのことである。

藥園址

本村町仙臺坂の南側に昔御藥園があつた。寛永年間此處に各種の藥草を栽培して將軍家に獻上し藥園の護持を仰ぐ爲園內に榮草寺と號する藥師堂を建立した。其後元祿年間に大塚の御藥園を此處に合併したが、正德三年三月十一日此地は廢せられて小石川白山御殿跡へ移轉した。

柳の井

山元町善福寺境內に在る。僧空海の遺蹟であるとの事は地誌篇第三章第二節佛閣の條に述べてある。碑銘に

毖彼石泉。　盈(クワニミチテ)レ科而流。　空海所レ呪。　其靈永留。
阿那揚柳。　水中影浮。　飮者治レ疾。　德潤二千秋一。

七佛藥師址

昔から七佛藥師で有名な東福寺は、今は既に無いが新堀町四番地にあつた。寛永寺の末派で醫王山と稱した。此東福寺に於ては賭博の樣な一種の射倖的遊戲が公然と行はれ其札料は一枚一匁八分で百番に當れば九十兩も貰へるので非常に盛んなものであつたらしい。七佛藥師の像は傳敎大師の作で昔太田道灌が深く信じ城內に拜めてゐたが其後轉々此地に移り來つて非常に靈瑞奇特があつて衆人隨喜渴仰の的となつたと言はれる。

竹ケ谷

竹ケ谷は今の竹谷町邊で、寢ぐるみ村、巢立野等とも言つて江戸時代の初期には、鶯の名所であつた。

鶯やたづね〳〵て麻布まで　芭蕉
竹のへをおりおり聞や五月暗　其角

城南讀書樓趾

今は跡方もないが東町三拾一番地邊りに享和三癸亥年林大學頭に依つて麻布古川端に建てられた敎授所が此城南讀書樓で南校とも呼ばれた。麻布は湯島の學問所(昌平校)より遠隔の地にあつた爲大學頭が特に此處に建て此附近子弟の就學の便宜を計つた。謂はゞ昌平黌の分敎所の如きものであつた。明治初年戊辰の變の時廢校となつたが此處からは有名な儒者が相當出た。

柳あり梅あり讀書樓高し　桐舍

麻布七不思議

冬の夜を語る麻布の七不思議

七不思議に就ては色々に言ひ傳へられて何れが本當であるか判らないが、大體次の様である。善福寺の逆さ公孫樹、六本木、かなめ石、釜なし横町、狸穴の古洞、秋月の羽衣(一本松)、廣尾の送り囃し以上の七種、或は西町の化椿、古川の狸蕎麥、蝦墓ヶ池、鷹石、狐しる粉、狸穴の狸蕎麥、善福寺柳の井戸、此外赤本などには、大黒坂の猫股、我善坊の大鼠、一本松の赤子の泣聲等々がある。斯うした餘り科學的でないナンセンスな傳説も麻布の昔を追想するにふさわしいではないか。

瓢箪床

今は無いが昭和四年迄赤羽橋際に瓢箪床と呼ばれる理髪屋があり其側に榎の老樹があつて麻布名所の一つとなつてゐた。昔、天正十八年八月一日徳川家康が始めて江戸に入城した時この木に駒の手綱をつなぎ側にあつた瓢箪床と呼ぶ休息所に休んだが、其時瓢箪床の主人に家康が髪結元締許可の御墨附を與へた。卽ち瓢箪床が江戸髪結の元祖で其子孫は同所で代々理髪業を營んで居たのだ。

第五章　大公使館及官衙

第一節　大公使館

露西亞大使館　狸穴町三

昭和五年六月裏霞ケ關より子爵鍋島直和氏及男爵都築馨六氏邸の跡へ工費七十萬圓を以て新築した。新大使館は明朗な虚飾のない海洋風の白堊館で現任大使はアレクサンドル・トロヤノブスキー氏 S. Exc. M. Alxandri Troianovsky である。總領事館も同大使館内にある。露西亞とは安政三年十一月初めて通商修好條約を批准交換し明治二十八年六月改正通商條約をなした。明治三十七・八年日露戰爭にはボーツマスに於いて、同三十八年十一月媾和批准の交換を遂げた。一九一七年(大正六年)露西亞大革命勃發してレーニンを領袖とするボルシエヴィキに使つて支配され「ソヴェート社會主義共和聯邦」を組織した。世界唯一の共産主義國家で今や其澎大な産業五ヶ年計畫實行中であり政治警察的にはゲー・ペー・ウー(統治國家政治保安部)の活動があり其成否は世界注視の的となり正に二十世期の驚威である。

フランス大使館　廣尾町三

昭和五年六月二十六日飯田町一丁目より移轉して來た。現大使館は成瀬正行氏邸を借用してゐる臨時的なもので、今麻布富士見町徳川義親侯邸跡の本館を改築修繕中である。現任特命全權大使はダミアン・ドッ・マルテル氏 S. Exc. M. le Comte Damien である。佛蘭西は安政六年八月始めて我國と修好條約の批准交換をなした。佛蘭西は政治的には共和政體を取り經濟的には米國に亞ぐ世界第二の金保有國で今や戰時賠償金及戰時外債問題に關し其對獨政策の一擧一動は米國と共に世界經濟界に影響を與へる重大な地位にある。

中華民國公使館　飯田町六ノ一四

昭和四年十月十三日麹町區永田町二丁目より舊紀州藩主徳川賴貞侯邸に移轉した。中華民國は始め清國と言つて明治六年修好條規を批准したのを條約締結の始めとする。同國は古來君主專制國であつたが明治四十四年大革命起つて清朝覆滅し、共和政體を布いて「中華民國」と改めた。現任公使は汪榮寶氏である。

西班牙公使館　市兵衛町一ノ二

大正十五年十二月四日市外澁谷より俗稱お化屋敷と呼ばれてゐた空地(當時大藏省用地)へ轉入して來た。同國は明治元年九月始めて我國と修好通商航海條約を調印し同三年三月批准交換を終了した。現在西班牙國特命全權公使フアン・デ・カルデナス・イロドリゲス・デ・リヴアス氏は市兵衛町に公使館が移つてから第五代目である。昭和六年四月本國に於て革命起り、西班牙皇帝アルフォンソ陛下は國外へ追はれて退位し共和國の樹立と共に平戸時代から我國に馴染の「赤黃赤」の國旗は新旗「赤黃紫」に依つて代られた。

加奈陀公使館　西町二二

昭和四年十月七日松方正熊氏邸へ始めて我國に同國公使館が設置せられた。現在カナダ特命全權公使ハーバート・マーラー氏 S. Exc. The Hon. Herbert Marler は初代公使である。

亞爾然丁公使館　本村町一四三

昭和六年五月二十一日東京府澁谷町金王十一番地より移轉して來た。現アルゼンチン特命全權公使はドクトル・マリオ・ルイス・デロス・リアノス氏(S. Exc. M. le Maris Rois)である。

第二節　官衙

貯金局　飯倉町六ノ一四

地下一層地上四層の高樓は其近世的建築樣式と相俟つて蓋し帝內の一偉觀である。舊徳川侯邸跡へ二十八ケ月の工期と三百八十七萬餘圓の總工事費を費した總延面積四〇、四七五、六五八平方米の內に約四千名の從事員を擁し日本大衆金融機關の中樞機關として飯倉臺上に聳立してゐる。昭和六

年四月二十日京橋區木挽町八丁目から移轉して來た。其設備は自働的に消防署に通ずるM・M式火災報知機・輸送管の眞空作用に因つて書類を移送するニューマチック・キャリアー、エレベーター・ファンダーシステムに依る局内電話等最新的各種の施設が完備してゐる。局内には業務課・經理課・爲替課・恩給課・證券課・庶務課・集計課・第一貯金課・第二貯金課・振替貯金課の十課に分れ現局長は吉野圭三氏である。

東京天文臺　飯倉町三ノ一七

昔此處は天德寺隱栖の地及尾州德川邸の一部分の趾であつた。初め東京天文臺は觀象臺と言つて海軍省に屬してゐたが明治二十一年、內務省地理局の觀象臺と帝國大學の天文臺とを此處に合併して、改めて東京天文臺を設置した。卽ち帝國大學理學部天文學科に屬してゐる。

本臺備付の星學器械中重要なるものはメルツの赤道儀、ハイデの子午儀二臺である。本臺は東京府下に三鷹天文臺が出來てより昔日の如くではないが今尙學徒研究の用に供せられ無限の宇宙に於ける神秘と不可解を科學的研究對象としてゐる。現臺長は帝大教授理學博士早乙女清房氏である。

內閣統計局　富士見町一

我が國に於ける第一國勢調査は大正九年十月一日行はれたが其爲此處に國勢院を設置し、大正十一年十一月國勢院廢止と共に統計局が設置せられ此處に於て行政各部統計の統一、國際統計事務の

統轄事項、人口統計、勞働統計其他國勢の基本に關する統計等を行つて政策遂行上の基本的參考材料を整理してゐる。且つて國勢院總裁として小川平吉氏及小笠原長幹伯が在り初代統計局長は阿部壽重にして現局長は長谷川赳夫氏である。局內には人口課・勞働課・庶務課・製表課・臨時農業調査課の六課があつて夫々事務を分掌してゐる。

麻布消防署　盛岡町三

本署は初め第二消防署盛岡町出張所（明治四三年九月廿九日設立?）と言ひ大正十三年十月第二消防署麻布分署に昇格し十五年七月一日麻布消防署に獨立した。現在の建物は昭和五年十二月二十八日に新築落成し現署長は消防士齋藤喜作氏で第三代目の署長である。消防機關士一、消防書長五、消防手三六、消防書記二、の定員にして文書係・統計係・會計係・物品係・機關係があつて事務を分掌し其管轄は麻布一圓である。本區飯倉町五丁目六十一番地に麻布消防署飯倉出張所がある。

（參考）享保四年四月江戸市街の各町協議し從前の店火消の名を廢し、更に相聯合し伊呂波を以て組號を定め四十七組とした。今當時鳥居坂署管內一帶が如何なる名稱の組に依つて警備されてゐたかを記して見る。

え組　麻布龍土町邊、飯倉町六本木町邊、本村町櫻田町邊
あ組　芝田町久保町邊、古川町一本松町麻布本村町龍土町
し組　麻布市兵衞町谷町邊、飯倉町邊、今井町邊、永坂町麻布新網町邊、寺社門前

第五章　大公使館及官衙

倘島崎藤村氏の「飯倉便り」には『飯倉四つ辻には、「ニ組」の頭が住んでゐる筈です。「ニ組」は西久保・飯倉森元あたりを區域とした消防組でなか〳〵氣おひな高の者だつた。』とある。

麻布警察署管内略年表

年代	
天長元年	弘法大師善福寺を開く。
天長九年	善福寺伽藍成る。
承和元年三月	弘法大師再度善福寺を訪ふ。
天慶三年	六孫王經基將門を討つ時麻布を過ぐ。
長元四年	河内守頼信平忠恒追討の爲麻布に來る。
海永三年五月三日	飯倉御厨の起立。
貞永元年	親鸞上人麻布の地を過ぐ。
同　年	善福寺眞言宗を眞宗に改む。
元應二年	善福寺中興了海上人歿す。
文明年間	太田道灌本村氷川神社を勸請す。
永祿二年	狩野大膳亮阿佐布を領す。
永祿九年十月	北條氏一向宗の事に關し善福寺に旋を出す。
天正十八年四月	豐臣秀吉御札を善福寺に建つ。
天正十八年七月三日	天正日記に『あざぶより源兵衛來る』と見ゆ。
慶長五年八月廿八日	麻布に關ヶ原戰死者の首塚築かる。
同　十年四月	秀忠夫人東福寺に十二神將像を寄進す。
同　十九年	市兵衛町起立。
同　年	飯倉瑠璃光寺起立。
寛永三年九月十八日	崇源院の龍前坊麻布野に建つ。
同　十五年	麻布御藥園設けらる。
同　十八年正月末	麻布に火災あり。
承應三年	馬場設置さる。（後の十番馬場也）
寛文二年九月	增上寺隱居所建てらる。
同　八年二月四日	火災あり。
同　十二年	文七元結麻布に創始さる。
天和元年十二月末	麻布に火あり。
元祿十一年	新堀の開鑿始まる。
同　年三月	麻布御殿造營成る。
同　十五年二月十一日	麻布大半燒ける。

同十六年二月四日　日ヶ窪毛利邸に赤穂義士十名切腹す。
同　年三月　火災あり。
正德元年正月四日　飯倉に火災あり。
同　三年三月　麻布藥園廢さる。
享保二十年十月　麻布邊燒亡。
延享二年二月十二日　麻布邊火に燒く。
延享四年十月六日　義士寺阪吉右衞門曹溪寺に歿す。
寶曆六年十一月廿三日　麻布大火あり。
同　十年二月四日　十番邊燒く。
明和九年十月廿八日　善福寺燒く。
安永元年二月廿八日　麻布全燒す。
天明四年正月十二日　麻布邊大火。
享和三年三月　城南讀書樓東町に開校す。
文政四年九月　上の字火傳符出し始む。
文政六年正月十二日　古川邊より出火品川へ飛火す。
同　十二年四月六日　長坂より出火あり。
弘化二年正月廿四日　麻布大半燒失す。

嘉永二年十一月十一日　日ヶ窪毛利藩邸に乃木希典生る。（六本木署管内）
安政二年十月二日　大地震
安政五年十一月十二日　火災あり。
同　六年　善福寺米國公使館となる。
萬延元年十二月五日　米國通辭ヒカスケン赤羽に刺殺さる。
文久三年四月七日　善福寺燒く。
明治元年　城内讀書樓廢校となる。
同　四年　第二大區に屬す。
同　八年九月　津田仙氏學農社を本村町に起す。
同　十一年十一月　麻布區となり區役所開廳す。（六本木署管内）
同　十二年三月十二日　廣尾町小澤火藥庫爆發し死者三十名。
同　十四年一月　麻布仲之町警察署開廳す。
同　二十八年四月　麻布中學校開校

（中山孤村氏輯「麻布區略年表」より抜萃）

麻布警察署管内略年表

附錄

附錄

目次

一、面積、戶數及人口……二四〇
一、皇族邸其他……二四〇
一、隣接派出所……二四〇
一、管內町名ト同一又ハ類似町名……二四〇
一、官　公　署……二四一
一、學　　校……二四二
一、大公使館……二四三
一、貴族院議員……二四三
一、衆議院議員……二四三
一、府會議員……二四四
一、市會議員……二四四
一、區會議員……二四四
一、町　會　長……二四五
一、方面委員……二四六
一、實　業　家……二四六
一、官　　吏……二四八
一、知名外國人……二四九
一、軍　　人……二五〇
一、華　　族……二五〇
一、有位者勳者……二五一
一、寺　　院……二五三
一、神　　社……二五五
一、教　　會……二五五
一、銀行會社其他……二五五
一、病院（醫院）……二五六
一、宿屋、下宿屋、木賃宿……二五七
一、雜誌、新聞販賣店……二五八
一、興行場（貸席）……二五九
一、適用工場……二五九
一、新聞雜誌發行所……二六一
一、重なる印刷活版業者……二六一
一、取締諸營業關係統計……二六二
一、右同衞生關係統計……二六三
一、右同保安關係統計……二六三
一、麻布烏居坂警察署員名簿……二六四

以　上

面積、戸數及人口（昭和六年現在）

面積	〇、一六方里
戸數	一〇、四二八
人口	四九、五一八
男	二五、四〇五
女	二四、一一三

皇族邸其他

東久邇宮邸	市兵衛町一ノ一三
高松宮御用地	盛岡町一ノ七
御料地	同

隣接派出所名

當署派出所名	警察署名	隣接署派出所名
一ノ橋巡査派出所	芝三田警察署	小山町巡査派出所
飯倉町五丁目巡査派出所	芝愛宕警察署	芝山内巡査派出所
同	芝三田警察署	松本町巡査派出所
飯倉町二丁目巡査派出所	芝愛宕警察署	神谷町巡査派出所
市兵衛町巡査派出所	麻布六本木警察署	六本木巡査派出所
同	同	今井町巡査派出所
同	芝愛宕警察署	神谷町巡査派出所
同	同	西久保巴町巡査派出所
同	赤坂表町警察署	葵町巡査派出所
鳥居坂巡査派出所	麻布六本木警察署	櫻田町巡査派出所
富士見町巡査派出所	澁谷警察署	豐澤橋巡査派出所
三ノ橋巡査派出所	芝三田警察署	綱町巡査派出所
同	同	豐岡町巡査派出所
同	芝高輪警察署	志田町巡査派出所

管内町名ト同一又ハ類似ノ町名

管内他署

當署管内	他署	管内
飯倉町	麻布署	飯田町（自六丁目至六丁目）
富士見町	同	富士見町（自一丁目至六丁目）
同	同	駒込署	駒込富士見町（自一丁目至三丁目）
山元町	同	山本町
新堀町	新場橋署	北新堀河岸
同	北紺屋署	南新堀（自一丁目至三丁目）
同	三田署	新堀町
新網町	愛宕署	新網町
同	兩國署	横網町
北新門前町	同	仲門前町（自一丁目至三丁目）
同	同	片門前町（自一丁目至二丁目）
同	三田署	新門前町
仲之町	神樂坂署	市ヶ谷仲之町
同	富坂署	仲町
同	大塚署	大塚仲町
同	象潟署	東仲町
同	同	西仲町
同	同	北仲町
市兵衛町	富坂署	市兵衛河岸
坂下町	大塚署	大塚坂下町
三軒家町	大塚署	三軒町
飯倉片町	本富士署	駒込東片町
同	同	根津片町
同	藏前署	新片町
同	竹谷町	上野署	竹町
西町	同	西町
西町	扇橋署	西町
東町	日本堤署	東町
東町	扇橋署	東町
永坂町	同	永町
本村町	同	本村町

官公署

名稱	位置
麻布島居坂警察署 公電赤坂〇〇一〇 直通四七、四八	永坂町 三六

内閣統計局	富士見町一—四	
東京遞信局講習所	廣尾町	三九
麻布消防署	盛岡町	三
麻布消防署飯倉出張所	飯倉町五ノ六二	
東京市水道局赤羽橋出張所	同 町五ノ六一	
遞信省工務課	新堀町	四
麻布郵便局	宮下町	三
麻布仲之町郵便局	仲ノ町	二三
麻布飯倉郵便局	飯倉町三ノ二七	
麻布二ノ橋郵便局	東町	三六
麻布三軒家郵便局	廣尾町	一
麻布田島町郵便局	田島町	二〇
東京市電氣局古川橋出張所	新堀町	七
貯金局	飯倉町六ノ一四	
東京天文臺	同 町三ノ一七	
麻布區役所	市兵衛町	二ノ六二、三
麻布郵便局保險局分室	永坂町	五一
貯金局構內郵便局	飯倉町六丁目貯金局內	

學校

名稱	位置	
東京實業女學校	飯倉町	四ノ四
麻布中學校	本村町	四一—四三
東京專修工業學校	新堀町	七
私立順心高等女學校	廣尾町	七九
東京帝國大學理學部分教場	飯倉町三ノ一七	
麻布獸醫學校	新堀町	一一
麻仲小學校	仲ノ町	七
東町小學校	東 町	三〇
新堀小學校	本村町	二〇三
本村小學校	本村町	一二〇
飯倉小學校	飯倉町五ノ六一	
麻布小學校	東鳥居坂町	三
東洋英和女學校	同 町	八
右 幼稚園	同 町	八
小暮幼稚園	飯倉町	四ノ四
安藤教會附屬幼稚園	本村町	二五
狸穴幼稚園	狸穴町	一九
麻布幼稚園	山元町	二〇

南部坂幼稚園	廣尾町	三五
東京遞信局公立講習所	同	三九
私立東海商業學校	新堀町	一一
私立東洋英和女學校附屬幼稚園	東鳥居坂町	八

大公使館

名稱	位置	
ソビイエット大使館	狸穴町	二
西班公使館	市兵衛町一ノ二	
加奈陀公使館	西 町	二二
中華民國公使館	飯倉町六ノ一四	
佛蘭西大使館	廣尾町	三
亞爾然丁公使館	本村町	一四三

貴族院議員（昭和六年三月現在）

爵位	所屬	氏名	住所	
東久邇宮稔彦王			麻布御殿	
男爵	正四位勳四等	公正會	安場 保健	一本松町 二四
男爵	從四位	公正會	高木 喜寛	東鳥居坂町一三
子爵	從三位勳一等	研究會	實吉 安純	同 町 九
子爵	從三位	研究會	渡邊 千多	本村町 三五
男爵	正三位勳二等	無所屬	南部 光臣	同 町 四九
勳三等		研究會	藤原銀次郎	新網町二ノ一六
正四位		交友會	山之內一次	富士見町 三三
正四位勳三等		無所屬	坂本彩之助	飯倉町三ノ二四
男爵		交友會	北里柴三郎	仲之町 一九
		研究會	市來 乙彥	本村町 一六
		同成會	末延 道成	鳥居坂町 二
		議員	浩	本村町 一六二
男爵			近藤 滋彌	廣尾町 一八

衆議院議員（昭和六年三月現在）

黨派別	氏名	住所	
政	板谷 順助	西町	二三
文部大臣 民	田中 隆三	仲之町	一一
政	鈴木 隆	飯倉片町	二五
前大藏大臣 政	三土 忠造	廣尾町	一六
內務大臣 民	安達 謙藏	同 町	二

民	村松恒一郎	富士見町	四三
政	熊谷　直太	本村町	二〇三
無	小泉策太郎	廣尾町	三四
政	倉元　要一	同町	三三
政	中山　貞雄	森元町	一ノ二七
民	由谷　義治	同町	一ノ二七
政	松岡　津右	宮村町	一〇
政	丹下茂十郎	竹谷町	二
政	兒玉　右二	市兵衛町	一二
民	岡本實太郎	富士見町	四三
民	横山金太郎	新堀町	七

府會議員（昭和六年三月現在）

氏名	住所
内田健次郎	新網町一ノ七二
花木　實	東町　四七

市會議員（昭和六年三月現在）

氏名	住所
内田健次郎	新網町一ノ七二
中村熊次郎	竹谷町　二
板尾廉次郎	本村町　一四五
田中利三郎	新廣尾町一ノ一一三
繩渡正人	同　一ノ一二三
峰村英一郎	市兵衛町二ノ一二五

町會長（昭和六年三月現在）

町會別	氏名	住所
飯一會	三木六太郎	飯倉町一ノ三
飯二會	深山小兵衛	同　二ノ一四
飯三會	詫間千太郎	同　三ノ六
飯四會	富井利兵衛	同　四ノ二
飯五會	草間九十九	同　五ノ三三
飯六會	菅沼涼太郎	同　六ノ九
狸穴町會	久保　春樹	狸穴町五三
片仲町會	草野　武雄	飯倉片町二九宮下方
我善坊自治會	石井伍四郎	我善坊町四二久松方
市兵衛町一、二丁目町會	野村埜太郎	市兵衛町二ノ一三
宮下町會	白井鐵次郎	宮下町　三一
新網一丁目町會	小島篠三郎	新網町一ノ七二
同　二丁目町會	松原　德治	新網町二ノ九
永坂町會	鈴木義多郎	永坂町　六六
南日ヶ窪町會	河合栄三郎	南日ヶ窪八　飯泉方
鳥居坂東鳥居坂町會	山川　泉	東鳥居坂町一三
三軒家町會	菅沼吉五郎	三軒家町八柏崎方
本村町會	遠藤外支吉	本村町一二一重六方
田島町會	片岡　群輔	田島町　五九
廣尾町會	田中仁藤次	廣尾町四九　島崎方
廣尾町親睦會	上松重太郎	廣尾　町　一
新廣尾町一丁目町會	青山　八郎右衛門	新廣尾町一ノ一二二　福岡方
同　二丁目町會	古瀬小市郎	同二ノ一〇六村上方
同　三丁目町會	吉田　角藏	同　三ノ一四七
富士見町會	岡本　貫一	富士見町　九
坂下町會	宮崎　新七	坂下町　一九
山元町會	上野信四郎	山元町四二　松吉方
新堀町會	益田左右治	新堀町七　小田島方

竹谷町會　中村熊治郎　竹谷町　二
東町會　花木實　東町四七
一本松町會　都筑俊親　一本松町四一
網代町會　鈴木清一郎　網代町一
宮村町會　高梨鍬太郎　宮村町一
宮村自治會　鈴木丑之助　宮村町四七
宮村第三部町會　原彙吉　同七六
森元町一町會　伊藤重五郎　森元町一ノ三　伊藤方
森元一丁目初音森元町會　信上清　同一ノ三　秋葉神社内
森元一、二町會　柳澤富右衛門　同二ノ九　高野方
北新門前町會　大草直好　北新門前町二
西町　酒井與吉　西町一九

方面委員（昭和六年三月現在）

氏名	住所
鹿島仙吉	北新門前町三
藤本充安	廣尾町七九
高梨鐵太郎	宮村町一
西崎謙三	新網町二ノ二
杉山長次郎	新廣尾町一ノ一三

竹松三郎　本村町三一
石井彙吉　新廣尾町三ノ一五五
蕪木安太郎　網代町一五
會田和平　新廣尾町二ノ一〇六

實業家（昭和六年三月現在）

職業	氏名	住所	
海上保險株式會社々長	末延道成	鳥居坂町	二
日本共立火災保險會社々長	原錦吾	本村町	一八五
日本電氣株式會社々長	岩垂邦彥	富士見町	一六
千代田生命保險會社々長	門野幾之進	東鳥居坂町	一
三井銀行重役	有賀長文	飯倉片町	三二
三井銀行取締役	池田成彬	永坂町	一
三井儀楽會社々長	三井元之助	仲之町	二〇
不動銀行頭取	牧野元次郎	同町	一五
田中銀行重役	田中銀之助	市兵衛町	一ノ五
川崎銀行頭取	川崎八郎右衛門	鳥居坂町	二
タクシー自動車會社々長	山口恒太郎	市兵衛町	一ノ三
日本銀行理事	籠生二郎	東鳥居坂町	一〇

明治屋キリンビール株式會社々長　磯野長蔵　廣尾町　五七
堀田合資會社々長　堀田金四郎　一本松町　二五
興行銀行總裁　結城豐太郎　永坂町　六一
惠比壽ビール會社重役　馬越幸次郎　市兵衛町　二ノ三
三井銀行頭取　三井守之助　永坂町　一
三菱本社長　岩崎小彌太　鳥居坂町　三
三井銀行重役　三井高光　一本松町　二〇
三井物産會社重役　三井辯藏　本村町　一六九
横濱保險會社々長　井坂孝　富士見町　一六
日本陶器株式會社々長　大倉和親　一本松町　二三
和田計器製作所長　和田嘉衛　永坂町　六九
惠比壽ビール會社重役　高杉普　本村町　一一六
住友銀行頭取　住友寬一　市兵衛町　一ノ四
王子製紙會社々長　藤原銀次郎　新網町　二ノ一六
臺灣製糖會社重役　武智直道　市兵衛町　二ノ三
實業家　熊本利平　東鳥居坂町　九
日本製糖會社重役　伊吹震　廣尾町　一九
實業家　中西嚴　富士見町　四五
同　松方正熊　西町　二二
同　柳莊太郎　本村町　三七
紙商　深山正　同町　一四五
株屋　岩田友右衛門　新堀町　四
會社員　木村德兵衛　永坂町　一
三菱會社理事　原田鎭治　同　一
安田信託取締役　戸澤芳樹　森元町一ノ二七
書壞　吉田茂松　本村町　一一六
東亞キネマ重役　小野法順　廣尾町　七九
太田胃散株式會社長　太田信義　本村町　一八二
丸ノ内海上保險會社重役　日向利兵衛　同　一四二
朝鮮銀行總裁　加藤紋三郎　同　一四三
淺野セメント株式會社技師　藤井光藏　同　一七九
白青社々長　竹谷町　五
太平生命保險會社重役　中村靜嘉　本村町　一五四
三井銀行重役　外山知三　市兵衛町　二ノ三
川崎第百銀行外國部長　八杉直　富士見町　九
三菱倉庫常務取締役　三橋信三　廣尾町　一四
人造肥料株式會社取締役　田中壽一　同　一五
星製藥株式會社取締役　中村藤一　同　一六

芝浦製作所重役	大竹武吉	廣尾町	一七
煙草元賣捌元締	石部泰造	同	一七
八洲商會常務取締役	久米寛三	同	一五
武藏野電鐵取締役	白石多士良	飯倉町四ノ二二	
資産家	林民雄	市兵衛町	二ノ八五
富士製紙會社々長	星光	仲ノ町	二五
帝國生命取締役	北里袈裟男	同	二三
國際自動車會社々長	波多野[illegible]	富士見町	四三
大崎製油會社重役	岩澤福松	富士見町	四三
日本郵船株式會社專務	小松原定吉	同	四三
第一不動火災保險株式會社々長	小林勝三郎	狸穴町	一六
千代田生命保險會社重役	麻生儀一郎	同	二七
三井物産會社員	櫻井信四郎	富士見町	九

官吏

官職	氏名	住所	
內務大臣	安達謙藏	廣尾町	二
文部大臣	田中隆三	仲町	一一
司法大臣	渡邊千多	本村町	三五
大審院判事	横村米太郎	市兵衛町	二ノ八四
大藏省理財局長	富田勇太郎	本村町	三九
同書記官	金子隆三	狸穴町	四五
同	花田正春	新堀町	七
鐵道省技師	田島武夫	三軒家町	二八
東京地方裁判所判事	中田滿義	廣尾町	一
行政裁判所評定官	阿部文次郎	同	七九
內務書記官	齋藤樹	同	七九
帝大教授	長與善郎	飯倉町三ノ一五	
同	三潴信三	仲町	一一
衆議院書記官	有松昇	本村町	二七
永代橋稅務署長	相馬敏夫	本村町	二二五
宮內省官吏	南部光臣	同	四七
同	島津久範	同	三八
帝大教授	平山信	永坂町	一
西班牙特命全權公使	太田爲吉	宮村町	一〇
宮內省式部職	松平慶民	富士見町	八
宮內省侍醫	高橋信	森元町一ノ二五	
帝室博物館長	大島義修	廣尾町	五八
商工書記官	田中隆一郎	仲ノ町	一一
警視廳警視	百鳥喜一	富士見町	四〇
文部政務次官	横山金太郎	新堀町	七
農林參與官	岡本實太郎	富士見町	四三

知名外國人居住者

氏名	官職	國籍	住所
伯爵ダミアン・ド・マルテル	駐日佛國特命全權大使	佛國	麻布廣尾町五 大使館內
フランソア・ゲズネック	佛國大使館錄事書記官	同	〃 富士見町四二
アレクサンドル・トロヤノフスキー	駐日ソヴイエート聯邦國全權大使	ソヴエート聯邦國	〃 狸穴町二 大使館內
ポリス・ポドレスキー	ソヴイエート聯邦國一等書記官	同	右 同
モイイズ・ガルコーヴイチ	右	同	右 同
オノラブル・ハーバート・マーラー	駐日加奈陀特命全權公使	加奈陀國	麻布西町二二
フアン・デ・カルデナス・イロドリゲス・デ・リヴアス	駐日西班牙國特命全權公使	西班牙	〃 市兵衛町一ノ二
汪榮寶	駐日中華民國特命全權公使	中華民國	〃 飯倉町六ノ一四
デ・ラトリ・レスポア	伯剌爾大使館一等書記官	伯剌爾國	〃 本村町一四四
アルツロ・アルバレス・モンテネグロ	亞爾然丁國公使館書記官	亞爾然丁國	〃 本村町一四三

軍人

官名	氏名	住所	
後備 海軍大將	日高莊之丞	新堀町	七
豫備 海軍中將	種子田右八郎	山元町	三七
海軍中將	原敬二郎	竹谷町	二
豫備 同	楠村永字	三軒家町	三七
同	上田良武	富士見町	四三
陸軍中將	小磯國昭	森元町一ノ二七	
海軍少將	矢島岸太郎	三軒家町	三三
退役 海軍	高橋三郎	本村町	三九
同 海軍大佐	武部岸郎	我善坊町	一六
〃 主計大佐	町田金次郎	本村町	五六
海軍大佐	和田信房	永坂町	七〇
豫備 陸軍大佐	森文之丞	唐尾町	一七
〃 海軍大佐	小倉篤次郎	同	八
海軍大佐	坂寄義雄	飯倉町二ノ一六	
同	澤木顯雄	宮村町	二八
同	緒山鋼太郎	西町	二三
同	日高劍	新堀町	七
同	高橋武次郎	同	六

華族

爵位	氏名	住所	
伯爵 從三位	中川久任	宮村町	一〇
伯爵 正五位	島津久範	本村町	三八
伯爵	葛城茂麿	永坂町	一
子爵	松平慶民	富士見町	八
子爵 正三位	池田政保	東町	四六
子爵 從四位勳六等	山尾三郎	東鳥居坂町	二
子爵 從二位勳一等功二級	實吉安純	同	二
子爵	京極高修	同	二
子爵 正四位勳三等	本田忠鉾	同	二
子爵 正三位勳五等	松平頼和	唐尾町	一四
子爵 從三位	毛利元秀	永坂町	七一
子爵 從五位	藤波茂時	飯倉片町	一
子爵 從四位	相良頼綱	東鳥居坂町一三	
子爵	戸澤富壽	本村町	一一〇
子爵	津輕義孝	市兵衛町	二ノ三
子爵	堀秀孝	東鳥居坂町	二

陸軍大佐 下村義和 富士見町 四三

子爵 正三位	渡邊千多	本村町	三五
子爵	久世廣武	新網町一ノ二三	
男爵 從四位	中川良長	本村町	一二〇
男爵	松村弘之	新堀町	七
男爵 從二位勳一等功二級	日高莊之丞	右	同
男爵 從四位	高木喜寛	東鳥居坂町一三	
男爵 正四位勳一等	安場保健	一本松町	二四
男爵 從四位勳六等	鷹司信熙	西町	二二
男爵 從四位勳三等	岩崎小彌太	鳥居坂町	三
男爵 正四位勳二等	北里柴三郎	仲ノ町	一九
男爵 從五位	住友吉左右衛門	市兵衛町一ノ二	
男爵 正四位	新田義美	仲ノ町	二一
男爵 正三位勳二等	南部光臣	本村町	四九
男爵	萬里小路元秀	唐尾町	一五
男爵	近藤滋彌	右	一八

有位帶勳者

位勳	氏名	住所	
正五位 勳三等	高橋保	田島町	五〇
正四位 勳一等	市來乙彥	本村町	一六
從四位	實吉純郎	東鳥居坂町	九
正四位 勳三等	横村米太郎	市兵衛町	二ノ公
勳五等	安鐘寅	同町	二ノ七
正二位 勳二等	中川平八	仲ノ町	六
從五位 勳五等功五級	貝沼速	飯倉町五ノ四〇	
正四位 勳二等	宮川邦基	本村町	二二〇
從四位 勳二等	原敬二郎	竹谷町	二
正五位 勳四等	太田爲吉	宮村町	一〇
從四位 勳三等功五級	坂部祐四郎	新網町一ノ四三	
從五位	御供信造	同	一ノ五一
從四位 勳三等	關口八重吉	同	四
從五位 勳四等	北川潔	同	四
正六位 勳四等	長與又市	市兵衛町	二ノ公
從五位 勳五等	末延道成	鳥居坂町	五
從二位 勳三等	佐藤愛麿	同	四
從五位 勳四等	澤田彥三	飯倉片町	二九
從三位 勳一等	三土忠造	唐尾町	六
從四位 勳四等	萬里小路基秀	同	一〇
從四位 勳四等	佐野辰一郎	市兵衛町	一ノ六

従五位	勲四等	下村義和	富士見町	四三
従四位	勲三等	大石鎌吉	永坂町	六五
従四位	勲三等功四級	上田良武	富士見町	四三
正三位	勲三等功五級	高橋武次郎	新堀町	六
従五位		花田政春	同	七
従四位	勲三等	日高釧	同	七
正六位	勲四等	牧田覺太郎	東町	二九
従五位	勲四等	蒲地景治	竹谷町	一
	勲五等	和田嘉衡	永坂町	六九
従四位	勲三等理學博士	和田信房	同	七〇
正四位	勲三等理學博士	平山信	同	一
勲三等		鈴木孝之助	飯倉片町	五
従四位	勲四等	和田匡夫	本村町	一一六
従五位	勲三等	富藤昇	本村町	一一六
従五位	勲三等	頭本元貞	同	〃
正四位	勲六等	鈴木馬吉	同	一一八
正六位	勲四等	小林庄吉	同	一一六
従六位	勲五等	神吉武吉	同	〃
従五位	勲三等	阿部文次郎	廣尾町	七九
正五位	勲三等	伊藤清	本村町	一二六
従四位	勲三等	杉浦貞次郎	廣尾町	七四
従四位	勲六等	齋藤樹	同	七九
従四位	勲四等	藤本充安	同	〃
従三位	勲二等	大島養修	廣尾町	五八
従六位	勲六等	神吉正一	本村町	一一六
従四位		中川良長	本村町	一一六
従四位	勲五等	木村精一	同	一一八
正二位	勲三等	小倉篤次郎	廣尾町	七四
正三位	勲三等	松平頼秋	同	一四
従四位	勲四等	秋山愛造	同	一七
正五位	勲三等功六等	森文之丞	同	一七
	功五級	山寺吉之助	同	一一
正四位	勲四等	松方正作	竹谷町	六
正六位	勲五等	岡本貫一	富士見町	九
正五位	勲六等	仁羅山政太郎	永坂町	四二
	勲三等	藤原銀次郎	新網町二ノ一六	
従四位	勲三等	飯島龜太郎	市兵衛町二ノ一四	
従五位	勲六等	鈴村秀三	我善坊町	二

正四位	勲一等	仙石貢	富士見町	二一
従四位	勲四等	河原作	森元町一ノ二五	
従六位	勲六等	三井守之助	永坂町	一
正四位	勲三等	杉村虎一	飯倉片町	六
正五位		有賀長文	同	六
正四位	勲三等	坂本彭之助	飯倉町三ノ二四	
正六位		高橋信	森元町一ノ二五	
正七位	勲六等	羽鳥一三	同	一ノ一〇
従三位	勲二等	西脇吉久	永坂町	六二
従三位	勲一等	安達謙藏	廣尾町	二
正四位	勲一等	田中隆三	仲町	一一
正三位	勲二等	渡邊千多	本村町	三五
従四位	勲四等功四級	種子田右八郎	山元町	三七
従四位	勲二等	宮川邦基	本村町	二二〇
従四位	勲三等	矢島岸太郎	三軒家町	三三
従四位	勲三等	植村永字	同	三七
従四位	勲四等	高橋三郎	本村町	三九
正六位	勲三等功四級	島崎一勝	我善坊町	一〇
		武部岸郎	同	一六
正四位	勲三等功四級	町田金次郎	本村町	五六
従四位	勲一等	日高莊之丞	新堀町	七
正五位	勲四等	小磯國昭	森元町一ノ二七	
従五位	勲三等	大和田勝介	廣尾町	七九
	勲三等	出口俊雄	山元町	一三
正六位	勲三等	久武戒三	飯倉町四ノ一二	
従五位	勲四等	緒山鋼太郎	西町	二三
正五位	勲三等	高橋武次郎	新堀町	六
従六位		百鳥喜一	富士見町	四〇

寺院

名稱	住職氏名	所在地	
光林寺	菅原義文	富士見町	三七
光照寺	森慈海	永坂町	四
光善寺	柳川洗照	山元町	二一
光藏院	小島直融	飯倉町	一ノ四
善福寺	麻布超海	山元町	三〇
善長寺	松濤玄成	飯倉町五ノ二三	

善光寺	一七	櫻井大慧	山元町
善通寺	一六	杖下瓊山	同
善正寺	二九	德峯了豐	同
本善寺	九	井上玄達	一本松町
本光寺	一九	星川行運	宮村町
天現寺	四九	豐吉東山	富士見町
天眞寺	五二		本村町
大法寺	一五	長尾觀孝	一本松町
大長寺	七	小野錬雄	永坂町
眞福寺	二七	南川龍道	山元町
眞淨寺	一九	小澤文秀	飯倉町三ノ二〇
稱名寺	一九	石川增雄	東町
稱念寺	一三〇	大河內隆治	本村町
淨廣寺	一九	田中賢成	東町
淨專寺	一九七	浪川朋秀	本村町
西福寺	一五六	瀧川彰眞	本村町
西福寺	一四	齋藤教開	同
瑠璃光寺	四ノ四	松岡培壽	飯倉町
德正寺	三五	松本隆溫	一本松町
賢崇寺	三六	峯玄光	一本松町
長傳寺	二九	香澤梵成	同
妙行寺	一〇	水谷拙宗	本村町
春桃寺	一二	戶松學瑛	同
心光寺	一九	小川智善	飯倉町五ノ五七
遍照寺	九三	高坂畏雄	本村町
明稱寺	一四七	松濤誠廉	同
阿彌陀寺	一	古川海祥	廣尾町
福泉寺	六	渡邊照叡	東町
延命院	一七七	草野日陸	本村町
妙覺寺	一八一	佐々木了巖	同
金藏寺	二五	若林知了	山元町
專光寺	一二		同
圓澤寺		森義孝	本村町
漕溪寺	一五八		同
一乘寺	二〇六	金子日宣	飯倉町三ノ一九
存命寺			富士見町
成田不動堂	四八	小宮山照雄	森元町
	一ノ一		

神社

名稱	社司	所在地	
氷川神社	羽倉信一	本村町	一
赤羽神社		飯倉町五ノ四八	
熊野神社	正宮光太	同	三ノ九
廣尾神社	山口潔壽	廣尾町	三九
高尾神社		竹谷町	五
竹長稻荷神社	內藤信太郎	永坂町	四三
末廣神社	鈴木一正	坂下町	三九
五社稻荷神社		山元町	五五
秋葉神社		森元町	一ノ二七

教會

名稱	宣教師	所在地	
日本メソジスト麻布教會		東鳥居坂町	八
麻布メソジスト教會傳導所		永坂町	五〇
安藤教會		本村町	二五
クリスチヤン教會		狸穴町	一九
麻布ホーリネス教會	秋山友一郎	網代町	二六
救世軍麻布支部		宮村町	八
飯倉天理教會		飯倉町五ノ二四	
天理教武陽支部	出牛篤太郎	北新門前町	三
天理教會	志村福松	本村町	一四六
天理教會		廣尾町	七七
日本キリスト麻布教會		廣尾町	三五

銀行會社其他

名稱	所在地	
安田銀行麻布支店	宮村町	一
安田貯蓄銀行麻布支店	新網町	二ノ二
日本晝夜銀行麻布支店	新廣尾町二ノ一〇八	
昭和銀行麻布支店	同	一ノ一二五
麻布銀行	新網町	二ノ八
安立電機株式會社	富士見町	三九
土橋製茶合資株式會社	網代町	二五
石渡電機株式會社	富士見町	六
麻布三業組合	網代町	二一

財團法人原田積善會　市兵衛町　二ノ八九
合資會社三九商會　新堀町　一一

病院（醫院）

名稱	所在地	院長
東海療院	網代町	一 花村泉
島田産科婦人科院	北新門前町 九	島田廣
眼科醫院	南日ヶ窪町 五	古川箴三郎
上野病院	山元町 五九	上野信四郎
伏島產婦人科病院	同	伏島與雄
小田原醫院	竹谷町 九	小田原鶴吉
古川醫院	新網町一ノ五五	古川誠助
古川橋醫院	新堀町 一一	鈴木篤眞
十番醫院	網代町 三	片桐明之助
二ノ橋醫院	山元町 五三	石原勝
海津醫院	山元町 四九	海津九十郎
日本婦人共立育兒會附屬小兒醫院	廣尾町 七九	中鉢不二郎
都築醫院	一本松町 四一	都築俊親
本田醫院	網代町 一一	本田一夫
阿部齒科醫院	坂下町 三	阿部伍市
村松醫院	新網町二ノ一五	村松袈裟治
高橋醫院	森元町一ノ二七	高橋信
岡田醫院	右同	岡田一平
太田醫院	市兵衛町 二ノ空	太田孝之
野村醫院	同 二ノ三	野村藍太郎
深田醫院	南日ヶ窪町一五	深田勇
伊東醫院	宮下町 三一	伊東恒道
齋藤醫院	廣尾町 七九	齋藤爲助
田口醫院	本村町 一四六	田口健次郎
赤十字麻布診療所	新堀町 一一	東京市立
土井齒科醫院	坂下町 三六	土井正夫
北村齒科醫院	宮村町 一	北村孝一郎
根本醫院	山元町 三	根本琪
愛生堂醫院	同 七	工藤伊曾七
大野間醫院	同 四六	大野間晉江
麻布醫院	網代町 三〇	川村義弘
綾部醫院	北新門前町 三	綾部利三郎
秋吉醫院	新網町 二ノ一	秋吉辰三

御供醫院	同 一ノ五一	御供信造
武內齒科醫院	新廣尾町一ノ三三	武內雅三
豐田醫院	新堀町 四	豐田榮
大森醫院	同	同 大森幸太郎
杉山醫院	東町 四	杉山正和
池上醫院	同 五	池上直次郎
宮地醫院	飯倉町四ノ一三	宮地貞彥
保坂醫院	同 四ノ一六	保坂護治
耳鼻科醫院	同 四ノ一三	劉泰翊
坂寄醫院	同 二ノ一六	坂寄養雄
水川齒科醫院	同 一ノ五	水川淳
水町醫院	本村町 一五〇	水町實程
瀨下醫院	永坂町 四八	瀨下正彌
森醫院	永坂町 四六	森鑛三郎
黑河齒科醫院	同 四五	黑河茂一
桑名醫院	宮村町 八	桑名緝吉
春桃院	本村町 一三	水谷拙宗
岡本醫院	富士見町 九	岡本貫一
鈴木醫院	網代町 一	鈴木清二郎
須美醫院	網代町 一	角虎雄
阿部醫院	狸穴町 一〇	阿部十郎
小林醫院	同 二二	小林義德
夏目齒科醫院	新堀町 七	夏目一喜

宿屋、下宿、木賃宿

名稱	所在地	經營者
麻布館	新網町一ノ七二	長瀨ヒサ
石橋館	網代町 一	加藤クニ
飯倉館	飯倉町四ノ一二	金田重太郎
福生館	本村町 一四六	大浦とめ
大明館	飯倉町五ノ一七	古屋憲
森久館	森元町一ノ二七	野々山みね
飯倉町	四ノ四	木田田木司
新廣尾町三ノ三		林ハマ
晃東館	新堀町 一一	吉瀨トウ
東陽館	本村町 二〇三	四條きくよ
麓摩館	竹谷町 五	鮫島エイ
麻布ハウス	市兵衛町 二ノ二	山形嚴
高丸家	本村町 二二五	高橋三重子

松榮館	網代町	一	森　はる
大濱屋	新廣尾町二ノ三	長谷川さと	
萬屋	同	同	佐々原末五郎
上總屋	同	二ノ九七	酒井みき
森田屋	同	二ノ一一〇	細入一定
大野屋	同	二ノ一〇七	福井直次郎
丸藤屋	同	二ノ一三八	馬場コト
河本屋	同	二ノ一三五	大原吉之助
大能屋	同	二ノ一三五	竹內いち
森田屋	同	二ノ一〇	青野ナカ

雜誌、新聞販賣店

名稱	所在地	經營者
雜誌店	廣尾町	一〇 町井三郎
同	飯倉町一ノ一二	曾根廉郎
同	坂下町	一六 荻原宏
同	山元町	四一 西野庄平
同	飯倉片町	二一 寺島源之助
同	新網町	四一 西澤庄平
同	山元町	二ノ六 富藤熊三郎
讀賣新聞店	飯倉町	五ノ九 杉田民雄
報知新聞店	永坂町	四〇 植草直次
時事新聞取次所	新網町一ノ六二	遠山眞信
雜誌店	宮下町	六 飯塚滿明
東町堂	東町	三六 河合たね
雜誌店	新廣尾町	三ノ八二 福永久七
同	新網町	二ノ六 齋藤熊三郎
同	田島町	二〇 白井泰一
同	本村町	二一二 川北鐘三郎
理髮屋	新廣尾町	三ノ五五 高木ハナ
東京朝日新聞十番販賣所	網代町	一 吉本一三
東京日日新聞十番販賣所	同町	一 石井留藏
中央堂新聞店	新廣尾町	二ノ九七 山家金治
雜誌販賣店	森元町	二ノ一 關山郡二
同	市兵衛町	二ノ一四 飯島和平
新聞雜誌販賣所	富士見町	三六 橋本又次郎
新聞販賣店	南日ヶ窪町	一一 和泉美根次
同	新廣尾町三ノ一五一	竹內剛

興行場（貸席）

名稱	所在地	經營者
南座	本村町	一三二 松竹株式會社
麻布日活館	宮村町	一 日活株式會社
十番倶樂部	同	二ノ九 永田猛
一之亭	同	二ノ一 平尾綾太郎
麻布河合（キネマ）	森元町	一ノ五 河合德次郎
福槌亭	宮下町	三 三上新太郎
小町亭	新網町	一ノ七三 福澤サク
大正倶樂部	北新門前町	三 高橋進
一ノ橋館	新網町	一ノ七三 大藏貢

適用工場

名稱	經營者氏名	所在地
製紐工場	多崎由太郎	富士見町 五三
化粧品工場	伊藤榮	本村町 一四五
鍍金工場	淺野松之助	新網町二ノ一三
同	志田孝	新廣尾町三ノ一五
鑄物工場	橋本駒次郎	同町 三ノ一五三
同	貞山一雄	同町 一ノ二三
同	福森貞式	同町 三ノ一五五
同	藤本省吉	竹谷町 二
電氣器具製造所	石渡電機會社	富士見町 六
電線工場	前出製紐工場	富士見町 五三
鍍金工場	吉田肇	新廣尾町三ノ一三
製菓工場	岡島嘉男	飯倉町五ノ五〇
綿打工場	阿藤平助	廣尾町 六四
通信機製造所	田澤一郎	富士見町 五三
同	安立電機會社	同町 五九
諸機械製造所	上村金太郎	竹谷町 二
同	松尾工場	同町 二
鑄物工場	市橋泰榮	新網町一ノ七二
同	藤本市藏	廣尾町 二二
鍍金工場	久保儀朔	新廣尾町二ノ一三
鑄物工場	杉山長次郎	同町 一ノ一三
同	三九商會	新堀町 一一

バルブ、コック製造所	光山金三郎	竹谷町	二
電球製造所	黒板泰輔	同	二
同	大久保米吉	新廣尾町二ノ一三三	
同	渡邊倉作	富士見町	三六
製材工場	岩崎七藏	新廣尾町二ノ三七	
同	川島正幸	廣尾町	六二
同	中村吉次	新廣尾町一ノ一三	
酸素熔接所	小俣邦雄	右	二ノ二九
板金加工業所	西村常太郎	廣尾町	一
同	渡邊傳次	新堀町	七
酸素熔接工場	佐藤盛男	新廣尾町二ノ一七	
製氷工場	近藤留吉	北新門前町	六
バルブ、コック製造所	八重澤仙松	新廣尾町二ノ一四	
歯車製造工場	長谷川喜代治	同	一〇八
發動機製造工場	友野直二	本村町	一五〇
蓄音機製造工場	中岡健一	竹谷町	二
電機製造工場	奈賀正人	新堀町	四
大理石加工業所	堀井永二郎	新廣尾町二ノ一三	
諸機械製造工場	井上政良	同	一ノ二三

ポンプ製造工場	大野寅之助	右	同
活版印刷工場	照部倉次郎	竹谷町	二
電球製造工場	森田春吉	新廣尾町二ノ一六〇	
電球加工業所	黒板矩雄	竹谷町	二
石材磨加工業所	小野里清作	新廣尾町二ノ一六	
諸機械製造工場	古藤久五郎	同	一ノ二三
酸素熔接所	松草恭次郎	同	二ノ一〇六
洋家具製造	澤潔虎男	永坂町	三七
諸機械製造工場	染谷關太郎	新廣尾町一ノ二三	
自動車附屬製造工場	高間守治	同	二
清涼飲料水製造工場	齋藤勇次郎	宮村町	八
板金加工々場	岩本佐兵衛	新廣尾町一ノ二三	
豆電球製造工場	矢島龍介	廣尾町	三五
酸素熔接工場	三田卯太郎	東町	二七
ラジヲ部分品製造工場	七尾靜介	同	三四
酸素熔接所	川端豐松	新廣尾町二ノ一三	
同	眞田勇治郎	廣尾町	一
自動車附屬品製造工場	野本仲次	竹谷町	二
電氣變電所	東京電燈麻布變電所	飯倉町五ノ四五	

酸素熔接鍛工場	齋藤源次郎	新廣尾町一ノ一三	
電氣熔接工場	森誠	同	三ノ八九
セルロイド加工塗業	長尾一次	新網町二ノ一四	
自動車諸機械製造工場	友野直二	田島町	三二
金屬器具工場	江澤定治	富士見町	三六
オブラート製造工場	高野忠治郎	新堀町	一一
鑄物工場	相川祐太郎	新廣尾町二ノ一三	
諸機械製造工場	垣内良之助	同	一ノ二三

新聞雜誌發行所

名稱	發行者	所在地
東都通信社	辻高重	北新門前町 三
業學週報	菱田橘太	本村町 一二
紀州公論	山崎鹿之助	森元町一ノ二七
國華	村山旬吾	市兵衛町二ノ一
麻布民衆新聞	森川鷹一	同 一ノ六
顯正	大草朝之助	飯倉町 五ノ七
經濟學講義	森八十男	我善坊町 四五
新聞雜誌發行所	橋本又次郎	富士見町 三六
東京輿論新報	小山八重三郎	市兵衛町 二ノ二
東京昭和新報	坂本勘三郎	北新門前町 二
東京時報	遠藤三郎	飯倉町五ノ四三
原理日本	菱田胸喜	富士見町 五三
株式通信	馬場千代	森元町一ノ二七

重ナル印刷活版業者

名稱	經營者	所在地
大雅堂	谷口伊三郎	森元町 二一
宮田印刷所	荒井虎太郎	飯倉町五ノ三七
創文堂	小池市太郎	森元町三ノ一〇
眞文堂	中井政治	飯倉町 三六
	山口七五郎	森元町 一ノ八
印刷所	貸我部便二郎	新廣尾町一ノ二三
印刷活版所	吾妻丹二	同 二ノ二〇
印刷所	山本潔	南日ヶ窪町 九
同	杉本幸太郎	東町 四
精巧堂	伊藤剛	飯倉町一ノ一一
昇文堂	高橋賢吉	東町 三七

良榮堂　青木榮　飯倉町　四ノ一
服部印刷工場　服部倉之助　竹谷町　二〇
文章堂　儘榮次郎　同　二〇
田中幸太郎　宮村町　一九
岩松長吉　森元町一ノ二七
中文堂　宮崎爲吉　飯倉町四ノ二二
城南堂　河野東吉　同　一ノ九
武宮印刷所　武宮瑪寶　本村町　六二
正文堂　中島嘉一郎　宮下町　一四
美鳳堂　小林班造　市兵衛町　二ノ究
博雅堂　吉田三次　富士見町　三六
明美堂　福田傳平　廣尾町　一
大海堂活版印刷所　加藏貞藏　新廣尾町　三ノ八三
製本所　和田吉藏　森元町　二ノ五
青山印刷所　青山才次　本村町　一五一
製本所　濱田喜代次　森元町　二ノ五
印刷所　坂井勝太郎　東町　三八
直進堂(三巧社)　尾張眞介　竹谷町　二
協和堂　高橋正勝　田島町　五二

英文舍　後藤讓治　新堀町　七
印刷所　尾崎末吉　新廣尾町　三ノ三
同　川名正直　同　三ノ二
正進堂　片倉時次郎　森元町　一ノ四
正同閣　横倉正一　市兵衛町　二ノ六
宮崎鉛版所　宮崎甚太郎　森元町一ノ二七
文榮社　高松甚太郎　新網町一ノ七〇
金英堂　和田善吉　網代町　八
山本印刷所　山本梅太郎　同　一
丸山印刷所　鈴木百太郎　坂下町　二八
正文社　齋藤正　南日ヶ窪町二〇
大正製版所　宮本義松　宮村町　二二
製本所　榎本鐵造　同　一八
印刷所　春山卯之助　森元町二ノ一七
製本所　宮本市太郎　同　二ノ三

營業關係統計

古物商　二三五　兩替營業　一
質屋　一六　浴場　二六

藝妓屋　四六　占業　二〇
藝妓　一二二　紹介業　九
待合業　四九　宿屋旅人宿　一三
料理店　八　木賃宿　九
飲食店　二四二　麵麭燒場　一六
遊技場　五三　貸席　二
請負業　四三　雜業　一六六
活動寫眞館　三　建築代願人　一四
演藝場　四　讀賣業　一
代書占　九

衞生關係統計

畜舍並繫宿營業　四　醫師　九一
賣藥部外品營業　三〇　齒科醫師　四一
貨寢具業　六　獸醫　二
牛乳請賣販賣業　一五　產婆　三八
食肉營業　九三　藥種商　二〇
美容術營業　一〇四　毒劇物營業　一六八
藥劑師　五三　柔道整復術營業　二八

清涼飲料水營業　五　按摩鍼術マッサージ灸術　五七
氷製造業者　一　療術行爲業者　四九
氷卸賣營業　九　病院　四
賣藥營業者　三四　病室　二一
賣藥請賣營業　一五三　診療所　一
賣藥行商者　二　看護婦會　一〇

保安關係統計

危險物貯藏所　三五　仕込刀劍　二六
拳銃　一〇八　仕込銃　二
短銃　三

麻布鳥居坂警察署員名簿

署長	警視	百鳥喜一	京都
同	警部	池田慶次郎	山形
同	警部補(警)保(交)	宮本顯義	茨城
同	(警)(衛)	井上常太郎	山形
同	警部補(司)	坂田登	茨城
同		土井辰五郎	長崎
同	衛生技手	鈴木治	福島
	防疫監吏	大川良一郎	東京
	建築技手	伊東哲郎	千葉
	電信技手	岡野六郎	茨城
同		阿部秀喜	秋田
	巡査部長(高)	大西喜寛	香川
同		山内信七	新潟
同		望月富貴男	東京
同	(刑)	芹田德安	同
同	(衛)	福田喜太郎	同
同		龍澤武男	長野
同		森山哲二	新潟
同		村田清文	山口
同		三宅三藏	熊本
同		松本增太郎	福井
同		上野憲太郎	大分
同		飯塚爲八郎	茨城
同		槇本榮治	岡山
同	巡査(刑)	泉田浦治	群馬
同	(保)	渡部文彌	茨城
同	(請)	日下團藏	東京
同		吉田清市	茨城
同	(會)	杉本寅之助	神奈川
同	(請)	平田大造	北海道
同	(防)	高橋達吉	神奈川
同		廣田國平	東京
同	(請)	佐々木萬作	宮城
同		新井廣治	茨城
同	(高)	岡安光	鹿兒島

同	(請)	山口竹松	長崎
同		小田廣藏	東京
同	(高)	池場直太郎	岐阜
同		吉川喜三郎	埼玉
同	(刑)	赤羽根袈裟太	長野
同	(衛)	瀨名源榮	靜岡
同		三村喜代之介	茨城
同	(請)	荒木純人	島根
同	(請)	增淵和平	茨城
同	(保)	塚越正	埼玉
同	(請)	中川偕能	德島
同		濱田宮永	鹿兒島
同	(交)	田淵奧太郎	福岡
同		大久保千佐次	長野
同		押川將雄	宮崎
同		柴野吉盛	新潟
同	(交)	稻村玉三郎	東京
同		石塚三平	新潟
同	(請)	大場岩吉	山形
同		中野幸市	香川
同		水谷龜次郎	三重
同		笠原初次郎	佐賀
同	(看)	西仁四郎	鹿兒島
同		水島暉壽	埼玉
同	(刑)	石井亮	千葉
同		大森恭雄	栃木
同	(交)	小宮英治	福岡
同		大西正夫	香川
同	(刑)	北富義雄	福岡
同		堀江仙次郎	茨城
同	(看)	大久保秀良	鹿兒島
同	(交)	西田民良	同
同		佐々木政行	愛媛
同	(交)	井手彖藏	福岡
同		山田幸造	石川
同		秋山定治	千葉
同		糸谷惣助	宮城
同	(衛)	井川清	茨城

巡査　浦野緒之助　東京
同　玉置英男　奈良
同　松本馨　高知
同　草間四郎　茨城
同　大矢光佳　長野
同　多羅尾忠太　東京
同　千田良吉　岩手
同　諏訪芳忠　長野
同　高橋悦郎　宮城
同　遠田幸治郎　山形
同　内田登　山梨
同　高橋儀司　宮城
同　桐越禮助　秋田
同　穴戸寅吉　宮城
同　西川正次　石川
同　寺岡金一郎　栃木
同　山口最平治　新潟
同　奥川金十郎　三重
同　花村豊　長野

（防）

同　（交）藤崎猛男　鹿児島
同　（交）澁谷要逸　長野
同　荒萬　福島
同　（高）阿久津亮　栃木
同　福永榮助　鹿児島
同　（看）西野常吉　石川
同　金澤淑郎　秋田
同　木下義道　佐賀
同　（刑）山内房吉　東京
同　淺田庄兵衛　東京
同　内山千克　茨城
同　鈴木善二　栃木
同　森島長次　茨城
同　（交）五十嵐大五郎　埼玉
同　羽田春水　大分
同　樫尾櫓太郎　秋田
同　平武夫　鹿児島
同　（通）田中昌訓　東京
同　武田芳壽　宮城

同　宮本春治　宮城
同　柏崎伊右衛門　岩手
同　佐藤留三　福島
同　秋吉豐吉　大分
同　石井幸　茨城
同　町田清　栃木

（高）

同　太田藤十郎　新潟
同　渡邊辰治　福島
同　吉田光輝　東京
同　末吉春雄　千葉
同　佐藤重治郎　宮城
同　神保義男　群馬
同　河野剛石　千葉
同　上田清　茨城
同　伊藤二郎　埼玉
同　園部正三　茨城
同　大根田清　栃木
同　元木捐二　山形
同　廣瀬仙治　兵庫
同　中山敏　茨城
同　永井堅吉　新潟
同　蔀養　茨城
同　當銘盛蒲　沖縄
同　絹川二郎　長崎
同　近藤德三郎　東京
同　岡本勝雄　宮城
同　村井四郎　山形

（通）

同　墳本靜　茨城
同　伊藤實　東京
同　臼井敦孝　東京
同　佐藤龜吉　山形
同　中村豐丸　鹿児島
同　大角善郎　富山
同　宗像三郎　福島
同　植竹正　茨城
同　向井兼若　鹿児島
同　園部昌禪　茨城
同　飯島千城　長野

昭和六年九月二十日印刷
昭和六年九月二十五日發行

【非賣品】

麻布鳥居坂警察署

編輯兼發行者　東京市京橋區槇町一丁目一番地　山口義次郎
印刷者　博英社
印刷所　電話東橋三九三番

巡査
佐藤國四郎　秋田
伊藤富平　新潟
石川清作　千葉
糸満盛信　京都
石附三男　新潟
岡野清三　兵庫
安西海三　神奈川
小川友藏　埼玉
三枝武司　千葉
朝藏秀雄　東京
須藤新市　栃木
秋山新吉　埼玉
大島木吾　茨城
本田壽　鹿兒島
藤井弘英　千葉
大槻明秀　茨城
高橋平八郎　秋田
山本悅義　高知
森田寅雄　長野

警察書記
鈴木鋼平　石川
早崎武長　崎
東田鉄　鹿兒島
桑原衛　廣島
清水正夫　長野
三枝實　千葉
伊藤米吉　東京
和田重經　鹿兒島
古宮良三郎　茨城
千島剛　東京

599
299